

普通の魔法使いが行く！Fate/Grand Order

秋塚翔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2015年、人類の未来は奪われた。

しかし希望は残っていた。幻想の楽園より送り込まれた普通の魔法使い。彼女は2017年から先の無い人類の命運を救う事ができるのか？

これは未来を取り戻す幻想の物語――

目 次

第一節	マイガスマスター	—	—	—
第二節	合流、そして召喚	—	—	—
第三節	明かされた真実	—	—	—
第四節	大聖杯へ	—	—	—
第五節	染まつた陰陽	—	—	—
第六節	決着 (K N O C K O U T)	—	—	—
第七節	少女は裏切りに疵を残す	—	—	—

86 72

58 44 25 11 1

第一節 メイガスマスター

ビュウビュウと、防音ガラス越しでも聞こえてきそうなほど吹雪いでいる外の世界。元々変わり映えしない雪山の中だつたが、激しい吹雪で真っ白に染まつてしまつた景色を一人の少女が窓際に腰掛け、ただただ何を思うでもなく眺めていた。

「——フオウ！」

「……？」

そこへ小さな足音を立てて白い小動物が近寄つてくる。

猫とも狐とも見える容姿にフワフワの毛。少女にとつて見慣れたその小動物は近寄つたかと思ひきや踵を返し、かと思えば少女の方に振り返る。まるで着いてこいと言わんばかりの仕草だ。少女は立ち上がるとその後を着いていつた――

追い越さないよう遅い足取りで着いていくと、小動物は曲がり角で走り出し姿が見えなくなる。少女がその角を曲がると、すぐそこに小動物が居り、その下には……一人の少女が倒れていた。

どうやら眠つてゐる様子の少女。この施設で支給される白い制服にウエーブがかつ

た金髪が良く映える。そんな少女の顔を、飛び乗った小動物はペロペロと小さな舌で舐めていた。

「……ん、あ？ 燐、じゃあないか。何だコイツ？」

ほどなくして金髪の少女は目を覚ます。顔を舐めて起こしてきた小動物に対して眉をしかめ、状況が飲み込めていないようだ。

「あの、おはようございます。朝でも夜でもありませんから、起きてください、先バイ」
「ん、おお、何だつて私はこんな所で寝てるんだ？」

「不明です。私も今来たところなので……」

そう話しながら金髪の少女は反動をつけて起き上がる。そして徐に頭を触つて周囲を見渡すが、「そうだ。今は被つてないんだつた」と一人で納得し、少女と向き合つた。「とりあえずおはようさん。ところでお前は何者だ？」

「はい、改めておはようございます。私は……えっと、すみません。名前が無い訳ではないのです。ただ自己紹介する機会が無かつたもので……」

少女は申し訳なさそうに顔を暗くする。それに金髪の少女が首を傾げていると、対角の通路から足音が近付いてきた。

「そこにはいたのか、マシユ。ダメじやないか、断りも無しに移動するのは良くないと……おつと、先客がいたんだな」

どうやら少女——マシユを探しに来たらしいシルクハットにスーツの男は、親しげに笑顔を浮かべる。

「君は今日から配属された新人さんだね？私はレフ・ライノール。このカルデアで働くせてもらつての技師の一人だ……マシユとはもう名前を聞き合つているかな」

「いいえ、これからでした。遅れましたが、私はマシユ・キリエライトと申します。こちらの毛並みが魅了的な小動物はフオウ」

「フオウ！ フオーワ！」

「あの、宜しければ先パイの名前を伺つて宜しいですか？」

「ん？ ああ、私は……」

言つて金髪の少女はふと思いつき立ち、まるで被つていらない帽子を押さえるように格好を付ける。そして不適な笑みを浮かべて名乗りを上げた。

「——私は、霧雨魔理沙。普通のマスター候補生だぜ！」

~~~~~

「さて……と、シミュレートとやらでまだ頭が冴えないし、こう言う時は部屋でしつかり寝るに限るなつ」

一通り区画を確認し終えた金髪の少女——魔理沙は、ぐつと伸びをすると宛がわれた自室に向かい出した。その肩には白いフワフワの小動物——フォウが一緒だ。

因みに本来ならこの後、ここ『人理継続保証機関フィニス・カルデア』の所長による説明会があつたのだが、

「あー、私はバス。眠いし、人の話は聞き流す質なんでな」

『良いのかい？遅刻でも、あの所長に一年は睨まれるぞ』

『そう言うのを気にしない質でもあるぜ。マシユ……だつけ？お前も一緒に昼寝でもどうだ？』

『とても魅了的な誘いですが、後学のために説明会に立ち会わせていただきます。また機会があれば』

と、見事なバツクレをこいていた。どうせ行つても何かしらのいざこざ起こして結局睨まれるだろうし、今回の目的やレイシフトなるものに関しては、この世界に来る前に聞いているので、問題は無いのである。

「お、ココか

そういう経緯を話してゐる内に魔理沙は自室に着いた。自動扉と言う見慣れない設備に戸惑いつつ、魔理沙が部屋に入ると……そこには、ベッドでくつろぐ男の姿があつた。

「——え、うええええええ!? だ、誰だ君は!？」

「アンタこそ何者だ。乙女の部屋に入り浸るとは太い野郎だ」

「あ、も、もしかして今日から配属されたマスター候補生？参つたな、このサボリ部屋ともオサラバかあ……」

ガツクリと肩を落とす髪をポニー・テールに纏めた男。どこか憎めない柔らかな雰囲気を感じる。男は気を取り直すと魔理沙に名を名乗つた。

「僕は医療部門トップ、ロマニ・アーキマン。皆にはDr. ロマンと略称されてるから、君もそう呼んでくれ」

「そうか、私は霧雨魔理沙だ。皆には異変解決の専門家と呼ばれてるから宜しくな」

「ハハハ、異変解決の専門家と来たか。これは凄い逸材をスカウトしてきたものだね」  
本気にしていないのか（事実、自称だし）男——ロマンは軽く笑つて流す。

「ところで今は確か説明会の時間だろう？もう終わつたのか、はたまた所長に叱られて追い出されでもしたのかい？」

「ああ、サボつたぜ」

「な、何て正直かつ大胆な……！君は大物になれるよ。じゃあ同じサボリ仲間として今後とも仲良く……」

《ロマン、あと少しでレイシフト開始だ。万が一に備えて来てくれないか？》

「…………」

「仕事だぜ、サボり仲間？」

ニヤける口に手を当て、意地悪そうに魔理沙は笑う。対して苦労人感を漂わすロマンはニヤける魔理沙を尻目に通信機を押し、通信相手のレフに応答した。

「分かったよレフ。そちらの現状は？」

『Aチームは安定、だがBチームの意識が乱れている』

「なら麻酔薬を打つとしよう。少し待つてくれ、すぐに行く」

『そこは医務室だろう？五分で着くと思うが』

ロマンはしまつたと手で頭を押さえた。

この個室は中央管制室からかなり離れている。サボリの代償。五分以上遅れでもすれば、今頃マスター候補生の指揮に当たっている所長にまた叱られる事だろう。次は減給も免れない……！

「……はあ、仕方ない。インドア派だがダメ元で走るとしよう。とりあえず行つてくるよ」

「送つてやろうか？私もレイシフトつてのを見てみたいからな。ブレイジングスターでひとつ飛びだ

「え、できるのかい？願わくばお願ひした——」

と半信半疑でロマンが言いかけたその時、二人の視界が暗転。目の前が闇に包まれ

た。

「あれ? 何だ、停電かな……?」

——ドガアアアアンツ!

《緊急事態発生。緊急事態発生。中央発電所及び中央管制室で火災が発生しました。中央区画の隔壁は90秒後に閉鎖されます。職員は速やかに第二ゲートから避難してください。繰り返します。中央発電所及び——》

直後、遠くからの爆発音とけたたましいサイレン、尋常ではない警報で白い室内は真っ赤に染まる。赤いライトに照らされるロマンの顔は、耳を疑っているように驚愕を表していた。

「火災!? それも中央管制室だつて!? それじゃあ今の爆発音は……!」

(！ 確か管制室じや説明会が……そこはマシユが……!)

「フオウ！」

思うが早いか、驚くロマンを放つて魔理沙(とフオウ)は飛び出す。目指すは第二ゲート……ではなく中央管制室。場所はさつき区画の確認で覚えている。

「お、おい! 一体どこへ……ああもう、僕も行くよ!」

辿り着いた中央管制室は、炎と瓦礫に包まれていた。その中には息絶えた職員たち、筒上の装置内で血を流しているマスター候補生たちの姿もある。唯一無傷な中心に座す真っ赤な太陽のような物体を囲う装置、あれが話に聞いたカルデアスだろうと魔理沙は判断した。

「くつ……こりや酷いな……」

魔理沙は袖で口を覆つて火中に踏み入る。

そうしてすぐに少女は見付かった……頭に血を滲ませ、下半身は巨大な瓦礫に押し潰されたマシユが。

「……あ……良かった、無事、だつたんですね、先バイ……」

「……そう言うお前は、不運だつたな」

「みたい、です……私の事はいいので、先バイだけでも逃げ、て……」  
医療に覚えのない魔理沙でも分かる。これは助からない。そして助からなかつた人間なら何度も見てている魔理沙だからこそ、冷静かつ冷酷に死にゆくしかない者に『不運だつた』と言えた。

ではこのまま放つて自分は逃げるのか?  
……否。そこまで冷酷にはなれなかつた。

「つ？……先、パイ？」

黙り込んで立ち尽くす魔理沙に、マシユは顔を見上げる。すると魔理沙はポケットから八角形状の物を取り出す。魔術を知識程度しか知らないマシユにも何となく分かる。それはただの物ではなく、魔術道具だと。

「マシユ、ちょっと目が眩むが我慢しろよ。どうせ死ぬなら、こんな熱い場所じやなくてベッドの上で死ぬ方がマシだろ？」

そう言つて魔理沙は取り出した八角形の物体を、瓦礫に向けて突き出す。中心の穴に魔力らしき光が溜まっていき、凄まじいパワーを感じる。マシユは察した。一般人枠で入ったはずのこの少女、魔理沙は瓦礫を壊す気だ。

と、そんな燃え盛る管制室の中でアナウンスの機械的な音声が流れる。

『……確認しました。適正番号48 霧雨魔理沙 を マスターとして再設定します。  
アンサモンプログラム スタート。靈子変換を開始します。

レイシフト開始まで あと3

1 2

全工程 完了<sup>クリア</sup>

ファーストオーダー実証を開始します』

魔理沙が何かするのが早いか、カルデアスが起動するのが早いか。どちらにせよ魔理沙とマシユの体は光の粒子に包まれ、何も分からなくなってしまった――

## 第二節 合流、そして召喚

「人理焼却う？」

突拍子も無く振られた、聞き慣れない言葉に魔理沙は団子を取る手を止める。しかし横取りはされぬよう皿に残つた2本をガツチリキープするのだけは忘れない。

ここは霧雨魔法店。魔法の森の奥深くにある何でも屋で、魔理沙の住居だ。その店主であり家主の『普通の魔法使い』霧雨魔理沙は、向かい合つて座る女性に訝しげに目をくれた。

「ええ、私の計算では近々それが確実に起ころる。そこで貴女には、その異変の解決を依頼したいのですわ」

八雲紫。境界を操る大妖怪にして、ここ幻想郷の管理者。いつもなら神社に良く出没する彼女だが、今日は朝一から霧雨魔法店を訪ねてきていた。しかも手土産団子を手に、まさかの依頼ときている。魔理沙は訝しげに団子を再び口に運びながら問う。

「どういう風の吹き回しだ？お前が靈夢じやなく私に異変解決の依頼なんて、明日は弾幕か妖精でも降るのか？」

「幻想郷の天気は、いつでも弾幕時々妖精ですわ。貴女だからこそこの異変には適任な

のです。魔術回路……いえ、魔力を持つ魔法使いの貴女だからこそね』

いつもの人を食つたような、からかうような不敵さではなく神妙な面持ちの紫。それに魔理沙は気になる事を追及はせず、異変解決の専門家（自称）として本題に入る。

「なるほどな。それで？その人理焼却とか言う異変はどんなもんなんだ？」

「そうね、簡単に言うなら……放つておけば今から二年後、2017年を境に人類は消えて無くなつてしまうわ」

「……そりやまた、随分と穩やかじやないな」

「穩やかじやないのよ。人間が消えれば、妖怪や神の存在を支える恐怖や信仰は必然的に無くなる。そうなれば幻想郷は外の世界もろとも焼却されてしましますわ」

言つて紫は魔理沙の淹れた出涸らし茶を一口啜る。その様子は少し余裕が無く、不機嫌な雰囲気だ。付き合いは浅いが長い魔理沙にはそう見て取れた。

魔理沙は残り一本の団子を食い終わると、依頼に返答する。

「そう言う事なら、私の出番だな。お前が訪ねてきたつて物珍しさと団子で引き受けてやろう。ちゃちやつと解決して、靈夢を悔しがらせてやるぜ♪」

ニヒルな笑みを見せる魔理沙。それに紫も予想通りの返答だと見透かされていたかのようだ、いつもの妖しい笑みを浮かべる。

「期待してますわ♪私も今回は少し細工をして、貴女の異変解決をサポートするわ」

「ほう、どんな細工だ？永琳の何度もやり直せる薬みたいなか？」

「それは見てからのお楽しみ。代わりに私の分の団子を食べたから、もう少し話に付き合つてもらいましょう。まず貴女がこれから行くカルデアと言う場所についてですが——」

~~~~~

「——熱い場所から飛ばされたと思つたら、また熱い場所か。情緒が無いぜ」

「フォウ！」

フォウに顔を舐められて魔理沙が目覚めると、そこは燃え盛る管制室ではなく燃え盛る外の世界——都市伝説異変で行つたことがある——の街だった。

確かマシユを助けるため、瓦礫を吹き飛ばそうとしたら体が光の粒子になつて……と最後の記憶を辿る魔理沙。そしてこれが紫から聞いたレイシフトか、と状況から考察する。

「面倒な時に来てしまつたが……まあ結果オーライつて奴だな。さて、これからどうするか」

腕を組み考え込む魔理沙。足下にいるフォウは、それを興味津々に見上げる。と、その時。ガチャガチャと忙しなく音を立て、何かが正面と後ろから迫ってきた。

「！……雑魚か。何すべきか分かりやすく助かるぜ」

魔理沙を取り囲んで現れる異形の集団。暗色の骨だけで構成された竜牙兵の群れだ。まるで生きている者は皆殺しだ、と命令を受けているかのように剣や槍を魔理沙に向いている。そこにはもちろん情などない。

対して魔理沙、余裕な様子。その手に八角形のアイテム、魔法で出した箒を持ち骨の群れを迎撃つ。

刹那、その骨の群れを蹴散らしながら何者かが魔理沙めがけて駆け寄ってきた。

「——先輩！ 大丈夫ですか！」

「ん……おお、お前マシユか。どうしたその格好？」

それは武装している差異こそあるが紛れもない、マシユ。深い紫色の装甲を纏い、巨大な盾を掲げて敵と相対する姿は全くの無傷に見える。マシユは盾で守るようにして魔理沙に言う。

「話は後ほど。まずは敵の掃討を。指示をください、マスター」

「はあつ、はあつ、はあつ……！」

火炎と瓦礫が散乱する町通りを、一人の少女がひた走る。その後を追うのは十数の竜牙兵。動くものは疲れ知らずの体でどこまでも追いかけ、無機質に始末せんと迫る。

「このツ……！」

振り向き様に、少女は竜牙兵を一体一体返り討つ。魔力を込めた小石を投げ放ち、銃弾に劣らないスピードで竜牙兵の体を撃ち抜き倒した。しかし焼け石に水。恐れを知らず数のある竜牙兵らは、一体倒されても怯まず標的を追い詰めんとする。

「なんで、なんで私ばっかりこんな目に遭わなくちゃいけないの!? もうイヤ、来て、助けよレフ……！」

虚勢は長く持たず、訳の分からぬ事態に少女は信頼する者へ届かない助けを求める。しかして声は届いた。だが、それは彼女の求める者ではなく……筈に跨がる金髪の少女だった。

——魔符『ミルキーウェイ』——

燃え盛る街にそぐわない目映い星が降り注がれる。色とりどりの星は骨の群れに悉

く炸裂し、その数を減らしていく。

一方、それを呆然と見やる少女の元には、大盾を持った鎧の少女——マシユが駆け付ける。

「オルガマリー所長！」

「あ、貴女、まさかマシユ!?」

驚く少女——オルガマリーの盾になり、マシユは星の弾幕から逃れて尚も襲い掛かる竜牙兵を叩き潰す。巨大な盾で防ぎ、押し返し、縁で碎く。弾幕に大半が撃破されたのも手伝い、竜牙兵の群れはすぐに壊滅させられた。

「……敵の駆逐を確認しました。戦闘を終了します」

「取りこぼしの片付け、お疲れさん。助かつたぜマシユ」

「いえ、むしろ私の方こそ助けられました。ありがとうございます、マスター」

辺りにもう敵はいない事を確認し、盾を下ろすマシユと地上に降りる金髪の少女こと魔理沙。二人が和気藹々に労いの言葉を交わすのに対し、オルガマリーはその二人に眉をひそめて独りごちるように呟く。

「…………どういう事?」

「所長?…………ああ、私の状況ですね。信じがたい事だと思いますが、実は……」「サーヴァントとの融合、デミ・サーヴァントでしょ。そんなの見れば分かるわ。私が聞

きたいのは、どうして今になつて成功したのかよ！」

「安心したせいか、調子が戻つて声を荒げるオルガマリー。その意味不明から来る怒りの矛先はマシユの隣、魔理沙へと向く。

「いえ、それ以上に貴女よ！私の演説を遅刻どころかバツクレた一般人！なんでマスターになつてるの!? サーヴアントと契約できるのは一流の魔術師だけなのに！」

「つまり私がその一流だつたんじやないか？逸材つてのは、意外な場所で発掘されるもんだ」

「そんな訳ないでしよう！一体どう脅してマシユを言いなりにしたの!?」

「と言うか、お前が所長か。私は霧雨魔理沙、以後宜しく。これ差し入れのキノコだぜ」

「ああ、これはご丁寧に。私はオルガマリー・アニムスファイアで……つて違あああああうツ！」

「あの……落ち着いてください、所長。私が無理に契約してもらつたんです」

ベースに飲まれかけたのを怒りから振り切り、荒ぶるオルガマリーをマシユが宥める。その甲斐あつてか、少しして気を取り戻したオルガマリーは深く溜め息を吐く。

「まあ良いわ。とりあえず霧雨、貴女をマシユのマスターとして認めます。以後、私の指示に従つてもらうわ。まずはベースキャンプの作成ね」

「それでしたら先ほど通信で伺いました。靈脈は所長の足元にあります」

「へっ!?あ、ああ、そうよね。それならマシユ、貴女の盾を地面に置きなさい。宝具を触媒に召喚サークルを開くから」

「は、はい……よろしいですかマスター?」

「あの程度の雑魚なら私一人でも捌けるからな。ボス級が来る前に済ませようぜ」

「はい、了解しました。それでは始めます」

魔理沙(マスター)からの承諾も受けて盾を地面に置く。すると盾から光が発せられ、幾何学的な空間が出現した。

「これは……カルデアにある召喚実験場と同じ……」

『シーキュー、シーキュー！もしもーし！よし、通信が戻った！』

そこへホログラムでロマンの姿が映り出す。オルガマリーと合流する少し前に、魔理沙の持つ通信端末で交信したので魔理沙とマシユは知っていた。しかし、初見のオルガマリーはまた声を上げる。

「はあ!?ロマニ!?医療部門のトップなんかが何で出るのよ！」

『うひやあああつ！しょ、所長!?生きていらしたので!?あの爆発なのに!?実は化け物だつたのか!?』

「失礼ね！それよりレフは、レフはどこー！」

『……大変申し上げにくいですが、あの爆発で生きていたスタッフは二十人程度。離れ

ていたスタッフでもそれだけなのに、レフはレイシフトの指揮をしていたから生存は絶望的だ』

「そ、そんな……！じやあ、マスター候補生たちは？」

『47人が危篤状態だ。医療器具は足りない。何人か助けられても残る大半は……』
「冗談じやないわよ！すぐ冷凍保存に切り換えて！治療は後回し、まずは生存させる事が最優先よ！」

『ああっ、そうか！コフインにはその機能がありました！』

ロマンは慌てて通信席から離れ、生き残ったスタッフに指示を送りながら通信の裏でマスター候補生の冷凍睡眠措置にかかる。その間、オルガマリーは爪を噛んで焦りぎみだ。

『……良いのですか？冷凍保存は本人の許可なく行えば犯罪行為なのに……』

「良くないわよ！ただ、生きてさえすれば後で幾らでも弁明できる。47人の命なんて私に背負える訳ないわ……！」

暫くしてロマンが戻ってきた。どうやら無事に冷凍保存を完了したようだ。流石に初めて実用する機能に難儀したか、一息吐きながら席に着いたロマンは引き続きカルデアの現状をオルガマリーに伝える。

『——報告は以上です。今のカルデアはシステムの八割を失っています。残ったスタッ

フではできる事が限られてるので、こちらの判断でレイシフトの修理、カルデアス及びシバの現状維持に人員を割いています』

「結構よ。ロマニ・アーキマン、貴方には引き続き私が戻るまでカルデアを任せます。私はこれから……この特異点Fの調査をするわ」

『ええっ！所長自ら？チキンの癖に！』

「黙らつしやいゆるふわドルオタ！この状況で何の成果も得られなければ、いよいよカルデアは破滅よ！これより霧雨魔理沙、マシユ・キリエライト両名を探索員として特異点Fの原因を調査、発見し次第退却します」

「見付けるだけなのか？」

と、ロマニとオルガマリーの話に着いていけてなかつた魔理沙が口を挟む。

『当たり前でしよう。本来なら47人体制で行うミツシヨンなんだから。残つた人員がマスターもどきとなりたてのデミ・サーヴァントでは、調査も一苦労だわ』

『それについてなんですが、所長。マシユは恐らく防御特化のサーヴァントと融合していく、ましてや所長の言う通り融合定着から間もありません。ここは魔理沙ちゃんに召喚を試させてみては？』

「……それもそうね。不本意だけど、戦力を補強して損は無いわ」

「可能なんですか？確かシステム・フェイントはまだ不完全のはずでは……？」

「物は試しよ。このまま行つて全滅じや洒落にならない。デミ・サーヴァント化した貴女を基点に、上手く機能してくれるがもしれないわ」

「良く分からんが、召喚か。魔法使いらしいな。それなら形から入るとしよう」

そう言うと魔理沙はふと手を服に翳す。

するとどうだろう。『ボワンツ☆』と軽快な音を立て、カルデア支給の白い魔術礼装は一瞬にして白と黒のエプロンドレスに早変わりした。

更に大きな帽子を出して被り、まるで古典的な魔女のような装いとなつてマシユ、オルガマリー、ロマンの目を丸くさせた。

「よし、やっぱこの方が動きやすいぜ」

「す、凄い……詠唱も無しに、お伽噺の魔法使いみたいです！」

「まさしくその通りだ。カボチャを馬車に、ネズミを馬に、恵まれない少女を一晩だけのお姫さまに変える。それがこの私だぜ」

「…………貴女、一体何者？ 一般人じゃないわよね？」

「秘密だぜ。乙女には秘密があつた方が良いだろ。まあ、紫みたいにだと胡散臭くなるがな」

「…………はあ、もう問い合わせるのも埒が明かないわ……とりあえず召喚してみなさい」

分からぬ事だらけに疲れたか、オルガマリーは大人しく魔理沙に複数個の石を手渡

す。七色に輝く魔力の石——聖晶石だ。

「おお、まるでこれに何十万も使い果たして破滅しそうな人間の欲望を感じる輝きだぜ」「それは……何とも言えませんが、否定もできません……」

貰つた石を召喚サークルの光にかざしつつ、魔理沙はそれらを召喚陣に投げ込む。そうする事で複雑な光の回転が置き、バチバチと火花を散らす。

「えーっと、そうだな。ここは魔法使いらしく呪文を……なんでも良いか。なんか出てこい！」

「そんな適當な!？」

元々このシステムに詠唱は必要無いが、それでも適當すぎた召喚文句にオルガマリーは堪らず突つ込む。勿論そんなのは関係無しに虹色の光が収束、召喚陣の中心に人影が現れた。

「——新免武蔵守藤原玄……ごめん、やり直し！ サーヴァントセイバー、新免武蔵。ここに推参！ 面白おかしく過ごさせてね、マスター」

出で立つ姿は侍。しかしその容姿は可憐な少女。刀を携えた勝ち気そうな少女は快

活に笑いながら名乗る。新免武蔵……宮本武蔵と。

「お見事です、マスター。サーヴァント召喚成功しました」

「初めてにしちゃ上出来だな、私。よろしくな武蔵」

「こちらこそ。いやー、しつかし召喚されたのがこんな大火灾の中とは思わなかつた。もつと一段落ついた正月の場所だと思つてたわ」

「……ウソ……」

親しげに会話する武藏と魔理沙、マシユの一方でオルガマリーはその結果に唖然としていた。実は余り期待しすぎてもなかつた召喚システムが機能したのもそうだが、魔理沙が——召喚の光から察するに——強力なサーヴアントを呼び出した事にもだ。失敗してスカ、成功しても大した英靈は呼べないと踏んでいただけに開いた口が塞がらない。

更に、

「！ マスター！ 今度は金色の光が！」

マシユの声に一同が振り向くと、召喚サークルの光が金色に輝いて収束している。そうして出現した二つの影に……今度は魔理沙が啞然とした風に呟く。

「…………なるほど、紫が言つてた細工つてのは、こう言う事か。こりや面白くなつてきた」

「アサシン、魂魄妖夢。この刀は主と貴方のために振るいましよう」

「フランドール・スカーレット、バーサーカーよ。貴方が私の遊び相手？ すぐに壊れたり

し
な
い
で
ね

第三節 明かされた眞実

金色の光を放つた召喚サークルに現れた二騎のサーヴァント。それは魔理沙が良く見知った知り合い、魂魄妖夢とフランドール・スカーレットだった。

「——つて、どうして私がアサシンなんですか!?」

と、素に戻った途端に妖夢は不満を口にする。

「私に聞かれてもな。あれじやないか? 寂界に住んでるし、半分靈だからだろ」

「だけど暗殺者つて! 私は幽々子様^{夢想異変}の剣の指南役で、白玉楼を守護する剣士ですよ!」

「庭師だろ。そういうや萃香^{夢想異変}の異変の時に会うやつ会うやつ斬りかかるってたよな。辻斬りっぽいぜ」

「うつ……そ、それは師匠の教えで……!」

「ちよ、ちよつと。なに良く分からぬやり取りしてるのよ? 貴女たち知り合いなの?」

問答を始めた魔理沙と妖夢に、堪らずオルガマリーが口を挟む。たつた今召喚したばかりのサーヴァントと一般人(なのか? とオルガマリーは疑い気味)が、何故知り合いの様に会話を交わしてる? マシユと、先に召喚した武蔵も同じ疑問を抱いてる様子だ。「顔見知りの縁起が悪いもんだ。それにしてもお前らが召喚されるなんてな」

「私もビックリ。いつの間にか眠つてて、魔理沙の声が聞こえたから来てみたら変な知識が頭に入ってきたんだもの」

「だから形式に則つて名乗りました。今の私達はサーヴァントと言う存在で、クラスやスキル、聖杯戦争がどういったものなのかは理解しています」

フランドールと妖夢がそれぞれ語る。どうやら紫が言つていた『細工』とは彼女達の召喚と見て違ひないだろう。事前に紫からサーヴァントの成り立ちなどは教わつている魔理沙はそう推察した。

『何はどうもあれ、召喚は無事成功したね。初めて会つた時から只者じやないとは思つてたけど、三騎もサーヴァントを呼び出すなんて凄いじゃないか魔理沙ちゃん』

「まあな。もつと褒めて良いんだぜ?』

「ふ、ふんッ、たまたまよ、たまたま。システム・フェイトは誰でも英靈召喚を可能にする技術。運さえあれば三流マスターでもサーヴァントを呼べるわ』

オルガマリーは毒づく。そこにはちょっと自分に言い聞かせてる部分があつた。

「とにかく!これで準備は整つたわ。現時点より特異点Fの調査を開始します。原因を発見し次第、カルデアの復旧を待つて退却。どんな事態であろうと私達が生きて帰ること、それが今回の目的よ!』

そんな自分の予想をことごとく裏切り、腹立たしく感じる魔理沙から視線を外して高

らかに宣言する。落ち着き払つたその姿は、まさにカルデアを仕切るトップの貫禄だと、そこへ手を上げて発言を求める者が一騎……妖夢だつた。

「？ 何よ」

「あ、はい。あの……余計な物言いなら申し訳ないですが『私達が生きて帰る』って、——貴女、もう死んでますよね？」

「…………（ZU—N）」

「気をしつかり持つてください、所長……」

自分は死んでいて靈体になつてゐる——露とも思わなかつた事実に、オルガマリーは茫然自失としていた。ふらつく足取りをマシユが支えて何とか立つていらされている。

言われてみれば思い出す、カルデアを襲つた爆発が自分の足元で起きた事を。一瞬の出来事だが確かな記憶。信じがたい事だが、嫌が応でも自覚せざるを得なかつた……自分は、もう死んでいると。

「す、すみません。気付いてないようなのでつい……」

「……フ、フフフ、フフフフフ……そうね、お笑いね。まさか死んでるのに気付かないなんて。そう言えば体が軽いわ。これ、レイシフトできて嬉しいんじやなくて肉体が無いからなのね！笑えるわ。笑えるわよね？……いつそ笑いなさいよおおおおおツ！」

「所長！大丈夫です、誰も笑いませんから！」

「うううつ、マシユ～……」

「はい、私はここに居ますよ」

さながら泣きじやくる子供をあやすように、抱き付くオルガマリーをマシユは優しく撫でる。

一方、オルガマリー達の先を行く魔理沙らはお気楽に言う。

「死んだのは残念だが、落ち込んでばかりじや何も始まらないぜ？今日の運が悪かつたんだ」

「そうそう。私が元いた世界では殺し殺されなんてザラよ？そんなの気にしてたら、楽しく過ごせないわ」

「と言うか人間と幽霊つて違ひある？飛べるようになるだけ、人間にとつて得じやない」「武蔵さんはともかく、先輩とフランドールさんはどうしてそれほど達観してるんですか……」

感心すべきかどうするべきか、マシユは迷う（因みに戦闘時以外では呼び方を先輩に戻した）。そうした所で魔理沙はフオローのつもりだろうか。マシユに胸を借りるオルガマリーに言葉を投げ掛ける。

「まあ、あれだ。生きてりや良い事あるつて」

「だから死んでるのよおおおおおつ！」

「ああつ、先輩の無意識か故意か分からぬ一言に、所長の精神が崩壊寸前です！」

いよいよワンワン泣き出したオルガマリー。それをマシユがお母さんばりになだめて、とりあえず一人で歩けるようになるまで暫く掛かつたと言う……

生きている人の気配はなく、動くものは燃え盛る炎と、骨や手といった人ならざるものと言う特異点F——2004年の冬木市。そこを流れる川に面した土手を魔理沙一行は通りがかつていた。

「降ろしてえええええつ!?」

「情けないなあ。小鈴でも、こんな高さはへつちやらだつたぜ？」

……空を飛んで。

「大体、何で調査で空を飛ぶのよ！それにどうして私も道連れ!?」

「異変調査は飛んで探すもんだ、私はな。お前は落ち込んでいられるのも鬱陶しいから、ショック療法つて奴だ」

「ショックにショックが重なつてトラウマになるわよ！とにかく降ろして！落ちるう！」

「そんだけ騒げれば大丈夫だろ。さーて、もう一段上げていくぜ！」

「やあああめえええてえええつ！？」

凄惨な街の空に姦ましい声が響き渡る。篠に跨がつて空を行き、声高らかにはしやぐ女の子達と言う構図は傍目から見れば微笑ましいものだが、実際は落ちないように必死でしがみつくオルガマリーからすれば決して微笑ましくない。

その眼下ではマシユ、武蔵、妖夢、フランドールが地上から二人についていつている。
「先輩、破天荒すぎます……」

「できると思いますよ？魔力や靈力が強い人間でああですし、靈体なら尚更です」
「そう」

「本当に？なら、これが終わつたらご教示願おうかしらっ♪」

そこの速度で先を行く魔理沙達だが、サーヴァントであるマシユらならついていくのは難しくない。高さの関係で離れてしまつてはいるものの、この特異点に存在する敵性存在は魔理沙達に危害を加えられる遠距離手段が無いので、マシユ達は安心して同行していた。

《――先輩、何か見えますか？》

《いや、相変わらず焼け野原……もとい焼け街だ。ただ上の方が涼しいな。マシユも来るか？》

《断りがたいお誘いですが、所長の精神安定上では危険かと。相乗りをしたら恐怖で所長がご臨終です》

《私が行つても良い？熱くて溶けそうだわ》

《つまらなくて弾幕勝負を仕掛けてこなければ構わないぜ》

《ちえー》

見通しの良い空を飛んでいる魔理沙に、マシユが念話をを行う（入つてきたのはフランドル）。オルガマリーをなだめた後、魔理沙はマシユからサーヴァントと離れても会話ができるこの方法の手解きを受けたのだ。その際、

『先輩にも知らない事があるのですね、少し安心しました』

『知識欲の塊だからな。知つてゐる事もあれば、もちろん知らない事もあるぜ』

『……シンダシンダシンダシンダシンダ……』

『例えば、こんなのに活を入れるやり方は知つてゐる。ちよつくら調査がてら空の旅と行こうぜ、所長！』

『は？え、なに、待つ、待てえええつ？』

『せ、先輩と所長が飛んだ……！』

と言う具合に、オルガマリーは魔理沙に空へ連れ去られて今に至る。確実に彼女の内で今日は、人生最悪の日断トツトップに殿堂入りした事だろう。

《とにかく注意してください、いつ思わぬ襲撃があるか分かりませんので。できれば傍にいてくださいると有り難いですが……》

《大丈夫だつて。私に任せ——》

答えかけたその時、ジヤラララツ！と下方から金属の擦れ合う音を立てて鎖の束が飛んでくる。鎖は魔理沙達が跨がる箒に絡まり、力強く引き寄せてきた！

「うおつ！」

「ちょ、今度は何——ツ！」

絡まれた鎖に引っ張られ、大きく揺らされる。そしてバランスを崩した魔理沙とオルガマリーは箒から転落。魔理沙は難なく地面に着地するが、オルガマリーは辛うじて

も川に落ちた。

「先輩！大丈夫ですか！」

「つたく、出鼻を挫かれた。一体何だ……つとお!?」

事態にマシユ達が駆け付けて魔理沙が立ち上がるうとした瞬間、嫌な予感から魔理沙は前のめりに転がる。直後に鎌らしき武器が魔理沙の首があつた場所を、空を切るよう通り過ぎた。

マシユ達の元に転げた魔理沙がそちらを見やると、そこには鎌を携えるフードの女がいた。

「残念。新鮮な獲物を仕留め損ねました」

「サーヴァント……!?」

「いきなり襲つてくるとは不躾な奴だな……そして、趣味の悪い奴でもあるか」

黒いドレスに身を包む、槍のような鎌を持つ女にマシユは盾を構え、武蔵と妖夢も刀を抜く。

一方、魔理沙は苦々しげに女の周りを見る。不気味な雰囲気を醸す女だが、それを更に増させるのは周りに佇む無数の石像……どれも顔が苦痛に歪んだそれらは、人間だつた。

魔理沙の言葉に女は妖艶な笑みを浮かべる。

「何か？私の狩り場に迷い込んだ獲物をどうしようと、私の自由ではないですか」

そう返しながら、女は徐に『ワカメみたいな髪型の男』の石像に手を這わせて……一息に首をねじ切った。

首を失つた体から噴水のように鮮血が吹き上がり、女に返り血を浴びせる。

「これで一体減つてしましましたが……問題ありません。新たに貴女達が加わるんですから」

「つ！マスター、指示を！」

「ああ、そこの妖怪みたいな奴を懲らしめろ！」

顔に浴びた血を舐め取り、魔力を行使して拭い去りつつ得物を一振りする女。それに魔理沙の号令の下、マシユ達は身構えた。対する女は嗜虐的に笑う。

「懲らしめる？私を？見たところサー・ヴァントやマスターになつたのは初めてなのに、できるものでしようか……ねツ！」

ダンツ！と地面を蹴つて女は真っ直ぐ突撃。その手に握る鎌を勢い良く突き出す。

それを防御するのはマシユ。大きな盾を目一杯踏ん張り、口ケットスターで繰り出してきた女の刺突を受け止める。武器と武器の激突に火花が飛び散り、地面が衝撃波で軽く抉れた。

「くつ……！」

「良く防ぎました。しかし気を付けなさい？これは『不死殺しの槍』。少しでも傷を負えばどんな奇跡でも癒えず、貴女はサーヴァントとして一生不出来になる！」

勢いそのまま、女は更に連撃を繰り出す。華奢な体に細い鎌……改め槍にも関わらずマシユを吹き飛ばさん威力だ。しかし防戦一方ではない。マシユの脇から武蔵と妖夢が飛び出し、二振りの刀で斬りかかる。

が、それらをバックステップで回避。少し下がつた女は反撃とばかりに鎖の束を放つ。

「なんの！」

生き物のようにうねる鎖に対峙した武蔵は、刀を上段から振り下ろす。放たれた波濤で鎖は吹き飛ばされる。その波濤に乗じて駆け出したのは妖夢。右手に持つカードを高く掲げた。

——魂符「幽明の苦輪」——

「はああッ！」

「？」

そうして突如分身した妖夢に、女は思わず驚く。半霊を実体化し、動きをトレースさせた妖夢は二連撃を叩き込む。不意を突かれて太刀を喰らった女は高く跳び、マシユ達と距離を取つた。

「ふ……少しはやりますか。ならばお遊びはここまで。纏めて戴くとしましよう」
 負傷を再生させた女は忌々しげに言うと、再び鎖を射出する。それは辺りに撒き散らされ、電柱や街灯に巻き付いて魔理沙達を囲う。さながら特設リングのように鎖が四方を取り囲んだ。

「に、逃げ場がありません！」

「元より逃がすつもりはないですよ？ああ、なんと瑞々しい……新鮮な内に殺してあげます……♪」

「つ……！」

リングを形作る鎖のロープに乗つて、女は上から獲物たる魔理沙達を見下ろす。ここから攻撃されれば、上への不利と限られた空間で劣勢になるのは見えている。それを分かつていてる上で女は笑み、マシユ達は戦慄していた。

だが一人、落ち着いて状況を見る者がいた。

「さあ、終わりです！」

「……ああ、そうだな、終わりだ——出番だぜ、フラン」

《はーい》

魔理沙だ。

自分のエリアに囲い勝利を確信する女を余所に、魔理沙の声に金髪の少女が靈体化を

解く。現れた少女……フランドールは徐に右手を女に向けて突き出すと、啖きと共に何かを握り込む。

「きゅつとしてドカーン」

——バキヤアツ！

「うあつ!?」

『同時、まるで連動するかのように女の槍は粉々に砕け散った。突然弾けた得物に女は怯む。』

『破壊の目EX』——フランドールの『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』が変化したスキル。エネミー本体を対象にできない制限が設けられてるもの、不死や破壊不能でない限り、宝具すら破壊の目を捉えて壊す事ができるものだ。

得物を壊され、怯んだ女に大きな隙ができた。その逆転を見逃す訳はない。妖夢が刀を伴い、スペルカードを宣言する。

「もらつた！」

「！　しまつ……！」

——断迷剣『迷津慈航斬』——

咄嗟に回避なり鎖なりで応対しようとする女だが、妖夢の瞬間的に上がる天狗すら見極められぬ敏捷にはついてこれない。青白い波濤が刀から立ち上り、力一杯叩き付け

る。波濤は鎖すらぶつたぎり、当然狙いの女は外さず、まともに喰らわせた。

凄まじい轟音が川のほとりで響き、やがて舞い上がった土埃が晴れる。そこにいたのは……満身創痍の女だった。

「く、つ……この、私が、こんな……！」

「チツ、しぶといぜ。一面ボスの割に固いな」

立つているのもやつとな様子だが、未だ憎悪に満ちて戦意充分な女。まだ育て切れてない妖夢の火力不足、そしてクラス相性の結果だ。それでもトドメを指さんと身構えたその時、

『やるな嬢ちゃん達。トリは俺任せな』

「！」

何処からともなく声が聞こえ、何もない場所に男が現れる。魔術で姿を隠してたのだろうか。杖を持つて見るからに魔術師と言う様相の男は、フードを下ろして女と相対する。対して女は、その男に見覚えあるようで憎たらしそうに言う。

「お前は、キヤスター……！」

「よもや卑怯なんて言うなよ、ランサー。お前さんは嬢ちゃん達に喧嘩を売つて負けた。

俺には与り知らねえ話だ』

「ぬう……！ おのれえええつ！」

渾身の力を振り絞り、女……ランサーは男……キヤスターに向かう。しかしサーヴァント同士でも満身創痍と全快。たとえ両者に元から力差があつたとしても勝負は見えていた。

キヤスターが空に描いた文字から火炎が放たれ、ランサーに着弾すると爆発。だめ押しの一撃を喰らつたランサーは、虚空を見詰めながら消滅したのだつた――

「悪いな。美味しいとこを持つていつちまつてよ」

「いや、お陰で楽できたぜ。ありがとうございます」

戦闘が終わり、騒ぎを聞き付けて他のエネミーが寄つてきていないのを確認すると魔理沙達はキヤスターとコンタクトを取つた。どうやら向こうもそのつもりだつたようで、フレンドリーに話し掛けてくる。

「しかしお前さん、中々できた采配だな。油断させといて隠してたサーヴァントで武器を失わせるとは」

「別に隠してた訳じやない。戦闘は三騎が基本だろう？それにフランは共闘に向かないからな。控えさせていざつて時にだ」

「三騎つて意味は分からねえが、割かし考えた戦法だ。そんなお前さんなら俺を上手く

使ってくれそだねえ」

「？ どういう事ですか？」

マシユが尋ねる。

「つまり仮契約しようつて話だ。俺はこの世界がおかしくなつちまつたんで、聖杯の泥に侵されたサーヴァントを倒してたんだ。とは言え、まだランサーとアサシンだがな」

答えるキヤスターはそこまで語つて一拍置き、続ける。

「しかし問題はセイバーだ。奴はこのおかしな世界で水を得た魚のように暴れ出した。さつきのランサーや他のサーヴァントがあんなのはそのせ이다。奴は俺一人じや太刀打ちできねえ。そこでアンタらのランサーを追い詰めた腕を見込んで、協力してくれないかって話だ……どうだ？ お前さん達は俺の話に乗れば、この異変を止められる。悪くねえ提案だと思うが」

川の欄干にもたれ、キヤスターは真つ直ぐ魔理沙に問う。対する魔理沙は少し思案するも、言い淀む事なく答えた。

「お前があのランサーやセイバーつてのと組んでて、私達を担ごうつて可能性は捨てきれないぜ？ 状況として有り得なくない話だ」

「おいおい、そいつを疑われちゃ俺に信じてもらう手は無えぞ？ ランサーの時も危なくなりや助太刀しようとしたが、嬢ちゃん達が思つた以上でタイミング逃したんだ」

「冗談だぜ。宜しくな、キヤスター」

「んだよ、大人をからかうなんざ大した度胸だ。ますます気に入つたぜ、嬢ちゃん」

そう掛け合い、協力の証とばかりに握手を交わす二人。快活な辺り結構似ているのか
もしれない。

と、和氣藹々とした一同に後ろから忍び寄る影があつた。それはゆらりゆらりと近付
き、一息吸うと……怒鳴りを上げる。

「わ、た、し、を……忘れるんじやないわよおおおおおつ！」

「あつ!? ショ、所長!？」

しまつた、とマシユは息を飲む。川に落ちたのを確認したが、まずは魔理沙の身の安
全と後回しにし、不覚にも忘れていたオルガマリー。濡れ鼠の彼女にマシユとは反対
に、魔理沙はあつさりとした反応だ。

「よう、やつぱり無事だつたか所長」

「アンタ良く言えたわね、それ?! 無事だつたか? 無事じやないわよ! 落ちるわ濡れるわ
冷たいわ! せめてサーヴアント倒したらすぐ助けに来なさいよ!..」

「すまん、忘れてた。けど生きてたんだから怒るなよ」

「もうとっくに死んでるのよ私はツ!」

「冷たいと感じられるつて事は生きてるようなもんだ。それに頭が覚めたろ? 死んだの

気にしてる暇があつたら先に進もうぜ」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ━━ !

「先輩、とりあえず謝つといた方が良いかと……そろそろ所長が怒りを通り越してバー
サークーになりそうです」

「ハツ、賑やかだねえ。こりや退屈しなさそうだ」

「同感だわ。はちやめちやだけど、面白いマスターに恵まれたわ」

「ただ自分勝手なだけですがね……」

「ねえ、そんな事より早く行きましょう？熱くて堪らないわ」

新たなサーヴァントを迎える、方向性も決まつた魔理沙一行。彼女達を待ち受ける
のは恐ろしい敵。しかし一行は賑やかかつ騒がしく、異変解決に向かうのであつた。

「……ふつ、キヤスターが漂流者に取り入つたか。じきにセイバーの元に向かおう。私
の役目が近いな」

その光景を遙か遠くから眺める弓を持つ男。彼はいずれやつて来るだろう彼女達の様子を見て、好戦的に口角を上げた――

第四節 大聖杯へ

「ぬうおおおおおおおおおおおッ！」

野太い雄叫びが、焼き払われた街をビリビリと震わせる。

それに呼応するように叫ぶ男——ライダーのサーヴァントの取り巻きかの如く、竜牙兵や腕の数々が大挙して眼前の少女達に迫っていた。

「こんなに相手するの、吉岡の連中以来ね！」

「遊び道具がたくさん！さつき遊べなかつた分、壊してあげるわ！」

相対するは武蔵とフランドール。地上から武蔵、上空からフランドールが大挙しているエネミーを掃討する。

一方、その後方に控えるのはマシユ、妖夢、キヤスター。マスター魔理沙とオルガマリーを守るため、迫り来るエネミーを片付けている。

何故前線の武蔵達が二騎きりで、後衛が三騎と多いか。それには理由があつた。

——禁弾「カタディオプトリック」——

「！ 来ます！ 皆さん注意して！」

「アハハハハハーツ！」

フランドールがスペルカードを出したのにマシユがいち早く反応し、盾をより踏ん張つて構える。妖夢とキヤスターも得物やスキル『矢避けの加護』を用い、高笑いを上げるフランドールから放たれる弾幕に備えた。

そう、後衛が多いのはフランドールがいるから。ランサー戦後にも魔理沙が言つたが、フランドールは共闘に向かない。それは弾幕が凶悪だからだ。なのでマシユたち防御や回避、弾幕処理に長けた三騎が後衛で魔理沙達を守つてはいる。

もちろんそうするだけの弾幕、エネミーには一堪りも無い。壁や柱に反射して暴れる弾幕に、エネミーの大群は壊滅的に一掃されていった。

「いやー、話には聞いてたがバーサーカーって扱いづらいんだな」

「当たり前よ。一流の魔術師でも自力じや魔力消費や制御でデメリットが大きい。しかもあれだけのサーヴァント、この時代の冬木にいたアインツベルンや遠坂の家でも扱い切れるかどうか……」

「ま、扱いづらくても使い方は知つてるがな。フラン！ そろそろ宝具開放して良いぞ！」
「はっ!? ちょ、貴女そんな躊躇なく……！」

その号令はフランドールに聞き届き、オルガマリーの制止は間に合わずしてフランドールはスペルカードを掲げた。

するとその手に持つ奇妙な形の杖から炎が舞い上がり、一つの巨大な剣として形成。

それを振り上げたフランドールは、眼下のエネミーの大群めがけて繰り出す。

「もうあなたはコインいつこ分もコンテニユーできない！——壊れちゃえ、『禁忌の炎剣』！」

——ズツバアアアアアアアアン！

天を衝くほど炎剣が、火炎弾を撒き散らしながら大群に叩き込まれる。より破壊的な火力は大地すら灰塵と化させ、竜牙兵や腕を堪える余裕すら与えず消滅させていく。下手しなくとも素材なんて焼き尽くしてしまつただろう。

「ぐうううッ！」

その中で、ライダーだけは耐え抜く。冬木の街より燃え盛るそこで身を焼かれつゝも、上空のフランドールを撃墜せんと攻撃しようとした……が、切り分かれた炎の隙間から人影が飛び込んでくる。武藏だ。

「斬り捨て御免、つてね。南無、天満大自在天神——」

ライダーめがけて駆けながら宝具開放の詠唱を始める。その背後に不動明王が顕現し、4本の腕にある剣でライダーを襲つた。

「仁王俱利伽羅仰天象！……ゆくぞ、剣豪抜刀！伊舍那大天象！」

「ぬがあああああ——ツツツ！」

続けざまに武蔵が自らの刀に波濤を纏わせ、ライダーに喰らわせる。凄まじい五連撃

に、いかなフランドールの宝具を耐えたライダーも断末魔を上げ、そのまま消滅したのだつた——

{ } { } { } { } { }

ライダーを撃破した後、一行は新たに加わったキヤスターを先頭に、特異点の原因たるセイバーのサーヴァントがいる地点を目指して林道を歩いていた。

「いやあ、バーリサーカーのサードアントとは無理に戦う必要は無いのね?」

「ああ、どういう訳か奴は森にある城跡から全く動こうとしない。こちらからつからんきや、敵の駒として数えなくて良いだろう。相手が相手だけに放つておくに越した事アねえしな」

「それもそうね……さつきの戦闘が良い例だわ」

キヤスターとの話からオルガマリーはフランドールを見やる。

戦闘前の方がマシだつたほど地形を変えさせたライダーとの戦いで、暴れぶりには、バーサーカークラスの恐ろしさの片鱗を見た。そして、それだけの力があるのを知つてなおフランドールに宝具を使わせた魔理沙の恐ろしさも。

因みにいつもの調子に戻つていいるオルガマリーだが、魔理沙やフランドールのドライ

な反応に落ち込んではいるが『馬鹿馬鹿しくなつた』らしい。それでも先のショックは軽いトラウマとなつてはいるので、マシユ達は極力『オルガマリーが死んでる件について』は触れない方向で接しているのだ。

「おっ、着いたぜ。この先がセイバーの居座る大聖杯のある地だ」と、目的地に来たキヤスターは足を止める。

そこは横に掘られた洞窟。流れる空気や響き渡る音から、相当広大な空間が広がっているのが推察できる。

「これは……天然の洞窟ですか？」

「半分天然、半分人工よ。魔術師が長い年月をかけて拡げた地下工房ね」「まるで地底に続いてそうだな」

魔理沙はいつか解決した間欠泉が噴き出し、悪霊が湧いた異変を思い出す。それを余所に、オルガマリーがキヤスターに問い合わせた。

「大事な事を確認してなかつたけど、セイバーのサーヴァントの真名は知つてはいるの？何度か戦つたような口振りだつたけど」

「そりやな。セイバーの真名は宝具を見れば嬢ちゃん達だつて嫌でも分かる。他のサーヴァントがやられたのも、奴の代名詞ともなる宝具によるものだ」

「一体それは……」

「約束された勝利の剣。騎士の王と讃れ高い、アーサー王の持つ剣だ」

「「！」」

後方からの男の声に、一行が振り返る。少し小高い崖のそこに弓を持つた男が一人。全体的に黒い印象を受ける白髪の男に、キヤスターは皮肉っぽく言い放つ。

「おう、言つてる傍から信奉者の登場だ。相変わらず聖剣使いを護つてんのか、テメエは」

「……ふん、信奉者になつた覚えは無いがね。招かれざる客を追い返す程度の仕事はするさ」

「要は門番じやねえか。何からセイバーを守つてゐるのか知らねえが、ここで決着をつけようや」

杖の先を向け、いつでも攻撃できるよう構えるキヤスター。同じくマシユや妖夢達も、目の前の敵——恐らくアーチャーのサーヴァントに各々武器を抜く。

「その時……」

「ちよつと待つたー！」

「！ マスター？」

まさかのちよつと待つたコール。突然割り込んだ魔理沙は、帽子の鍔を下げつつ前に出る。キヤスターより前、アーチャーの真ん前に。

「そろそろ私にも暴れさせな。後ろで指示するばかりも少し飽きてきたところだ」「は……はああっ!? 何言つてゐのよこの白黒マスター! いくら出鱈目な貴女でも、生身でサーヴァントに敵う訳ないでしよう!」

余りにブツ飛んだ発言に、オルガマリーが代表して声を荒げる。マシユも同意見と言つた面持ちだが、妖夢は結構普通。フランドールは不満げに口を挟む。

「独り占めしないでよ、魔理沙。私もやる!」

「令呪を以て命じる。『私の言うことを聞け、フランドール』

「あつ!……ズルい!」

「お前の味方も巻き込む危なさは良く知つてゐんでな。セイバーの方はくれてやるから、こつちは寄越せ」

令呪を一画使い、魔理沙はおどけながらフランドールを制する。そんな魔理沙にアーチャーは呆れ気味な様子だ。

「サーヴァントを引かせて、マスター自らが出るか。とても正氣の沙汰とは思えんな」「狂氣の沙汰でも楽しむのが私だ。スリルの後に飲む酒が旨いんだ、これが」

箒とミニ八卦炉を手にし、有無を言わせず臨戦態勢を取る魔理沙。オルガマリーの言

う通り、生身の人間が尋常ならざる力を持つサーヴァントに立ち向かうのは常識的に無謀と言えた……少なくとも、マシユとオルガマリーの中では。

「安心しろ。伊達に私も修羅場を搔い潜つてない。お前らは異変の黒幕を頼んだぜ」しかし魔理沙に、その常識は通用しない。いつだって彼女は自分の思うままに動く。常識とか理屈とか、魔理沙には関係無かつた。

それを、彼女のサーヴァントであるマシユは言葉から感じ取る。

「……分かりました。こちらも任せてください、マスター」

「ちよ、マシユっ!?」

「大丈夫です所長。まだ知り合つて短いですが……マスターの、先輩の言葉は信頼できます。何故か分かりませんが、そうだと分かるのです。だから私もマスターの信頼に応えます」

耳を疑うような様子のオルガマリーに、マシユは凜として語る。そこに不信や不安と言つた一分の迷いは無かつた。

「…………っ！ああ！もう何で神様はこんな滅茶苦茶な奴を生き残らせたのよツ！」

唯一残つたマスター候補の暴挙、自分と同じ価値観があると思つていたマシユの真つ直ぐなマスターへの信頼。思う通りにならない状況を、オルガマリーは神に恨む。そし

て納得いかないと顔に出したまま魔理沙に向く。

「分かった！自信があるなら任せるわ！その代わり、セイバーは私達が倒すわよ！私の采配で！大元を倒せなくて、後で後悔しても知りませんからね！」

「ああ、期待半分で任せるぜ。早く行つて倒さなきや、私が総取りしちまうぞ？」

「ぐつ……！い、言われなくとも！」

「それではマスター。ご武運をお祈りしていきます！」

ふんっ！と文字通りそっぽを向き、オルガマリーは洞窟に踏み入る。彼女に続くように武蔵と妖夢、やはり不満げなフランドール、最後にマシユが魔理沙の身を案じながら先へ進む。残つたのは魔理沙と……魔理沙と並び立つキヤスターだけとなつた。

「まだ成り立ての新米マスターかと思ひきや、マスターどころか一端の戦士じやねえか、嬢ちゃん。俺もご相伴に与つて良いか？ 奴^{アーチャー}とは因縁があるもんですよ」

「仕方ないな。特別だぜ？ 言つた手前なんだが……一人じや手に余る相手だ」

「……やれやれ、果たして良い度胸だと褒めるべきか蛮勇だと笑うべきか、迷うものだ」「どう思おうが勝手だ。だが、良かろうと悪かろうと最後は評価を変えてやるぜ」

「大した自信だな。ならば見せてもらおうか、その元となる実力を！」

トレー
言つて、アーチャーは剣を投影。弓に装填すると矢に変換して並び立つ魔理沙とキヤスターに放つ。しかし初手を読んでいたキヤスターは即座に迎え撃つた。

『e i h w a z』！」

詠唱と共に矢は消滅。と同時に、魔理沙がミニ八卦炉から星型の弾幕を撃ち返す。それをアーチャーが上に跳んで避けると、続いて箒に乗り追い掛けた。

「隙ありだ！」

「む……」

追い掛けたスピードのまま、箒をアーチャーに繰り出す。魔力で強化した箒の穂は、鈍器のような威力を持つている。

が、アーチャーはそれも仰け反つて回避。そしてムーンサルトでもするかのように、魔理沙に蹴りを見舞い返す。即座にガードした魔理沙だが、重い一撃に弾き飛ばされた。

「そちらがな！」

「！ うおつと！」

弾き飛ばした魔理沙にアーチャーは弦を引き絞り、矢を三本纏めて撃つ。空を切り急所めがけて飛んでくる矢を、魔理沙は少し慌てながら態勢を立て直すついでに掠る。^{グレイス} その間にアーチャーが地上に降りると今度はキヤスターの火炎がアーチャーを襲い、剣を投影して切り飛ばした。

「ふつ、良い攻防と連携だ。口先ばかりでなく安心したよ」

「お前もな。相手に取つて不足なしだ」

「場所を変えようや。ここじゃお互い満足に戦えねえだろ」

「上等だ……！」

また投影した矢を撃ち放ち、キヤスターを動かさせるアーチャー。三者は戦いながら拓けた場所に移動するのだつた——

「あー、もう！腹立たしい！何なのよあの白黒は！」

洞窟を進むオルガマリー一行。その中核をなすオルガマリーは、怒り収まらぬ様子でズンズンと歩いている。もちろんその原因は彼女が白黒と罵る少女、魔理沙だ。

『バイタルチエックする必要ないくらいお怒りなのが分かりますね、オルガマリー所長』「どうも所長と先輩の相性は最悪のようです。まるで以前に文化として視聴した、仲良く喧嘩する猫と鼠のように」

『それはむしろ仲良い気が……』

「誰とどこの白黒が仲良いですって!?」

『うひやあつ!? ま、全くそんな事は言つてないけど、ごめんなさいツ!』

聞く耳を持たないくらい苛立つオルガマリー。基本的な何でも指示通りに進ませてきた彼女としては、常識外れの魔理沙は度しがたい苛立ちの対象だろう（次点でロマンも）。振り回されたのも乗じて、オルガマリーにとつて魔理沙は天敵だった。

「でもあのくらい滅茶苦茶な方が、面白くって良いと思うけどなー。ほら、何でも思い通りだと味気無いじやない？」

「魔理沙さんの場合、思い通りにならなすぎて厄介なんですよ。前なんて靈夢さんと幽霊捕まえて涼んでて、いくら言つても満足するまで解放しないんだから……」

「パチュリィがいつも頭痛そうにしてたわ」

「私も非常食用のドライフルーツだけじゃなく、頭痛止めの薬を常備したくなるわよ……」

三者三様。魔理沙について色々な意見が飛び交う。それにマシユとロマンは仕方なく見守るしかなかつた……

そんなこんなしている内に元が広い洞窟の視界が突然拓けて、より広い空間に行き着く。人が何万、何十万入るかと言う広大な空間。その中心に大聖杯が鎮座していた。

「これが大聖杯……超抜級の魔術炉心じやない……なんで極東の島国にこんなものがあるのよ……」

余りの規模の代物にオルガマリーは先程での怒りはどこへやら、呆然とする。と、武

藏と妖夢が何かに感付いた。

「……驚いてるところすみません。どうやら現れたようです」

刀を抜き、それぞれの構えを取る二騎。マシユ達が見れば大聖杯の根本、高い断崖の上に彼女がいた。見るからに凄まじいオーラを放つ剣士が。

「なんて魔力放出……あれば、本当にアーサー王なのですか……？」

『間違いない。何か変質しているようだけど、彼女こそブリテンの聖剣の使い手、アーサーだ。伝説とは性別が違うけど、何らかの事情で男装していたんだろう。お家事情で。宫廷魔術士の悪知恵だろうね』

モニターに示される靈基反応から、ロマンはその剣士をアーサー王と断じる。するとそのアーサー、セイバーのサーヴァントは感情の見えない顔を笑みに歪めた。

「——ほう。面白いサーヴァントがいるな。面白い、その宝具。構えるがいい、名も知れぬ娘よ。その守りが真実かどうか、この剣で確かめてやろう！」

「来ます！所長、指示を！」

「ええ、見てなさい白黒っ！貴女のサーヴァントに完璧な指示をして悔しがらせてやるわ！」

一層魔力の放出が強くなつたセイバーに、マシユを始めとしたサーヴァント達は身構える。オルガマリーも意氣は充分に、セイバーを撃破しようと指示を下そうとした。

だが、その時。

「つ!?あ、貴女は……！」

「え……？」

「…………」

「！もう一騎サーヴァントが!？」

セイバーの後方から別の、キヤスターの話なら撃破した4騎と魔理沙とキヤスターが相対しているアーチャー、城から離れないバーサーカーの計6騎いる敵サーヴァントとは明らかに違うサーヴァントが現れたのだ。

そのサーヴァントはセイバーに視線を送り何か話しかけると、構えていたセイバーが下がり、新たに現れたそのサーヴァントが前に立つた。

瞬間、マシユ達の目の前は光に包まれ、反応する隙も無く爆発に飲まれてしまうのであつた——

第五節 染まつた陰陽

(花の魔術師め、まさかこれも仕込みの内か……!?)

人気が無く、静寂に包まれていた山の上の寺。その屋根に立つアーチャーはここに居ない誰かに向けて悪態を吐く。

「今度はこっちの番だ！」

——魔符 「スター・ダスト・トレヴアリエ」——

「……！」

そんなアーチャーの更に頭上、箒に跨がり夜空を飛ぶ魔理沙が弾幕を繰り出す。寺と言う場にはそぐわない色鮮やかな星々が降り注ぎ、アーチャーは屋根の上を駆けて搔い潜る。

「俺の事も忘れんなよ！『アンサズansuz』！」

「！ チイツ！」

更に地上のキヤスターが援護射撃を行う。宙に描いたルーン文字が幾つもの火球となり、アーチャーを強襲。舌打ちするアーチャーは屋根瓦を踏み碎く勢いで跳躍しかわした。が、そうして空中に移つたのを魔理沙は見逃さない。

「がら空きだぜ！」

——星符「サテライトイリュージョン」——

スペルカードを切り替え、自分の周りに七色の魔法玉を浮かばせて魔理沙は猛然と突つ込む。彼女と違い、空中を満足に動けないアーチャーは回避行動を取れない。それを狙つて魔理沙は一気に詰め寄る。

「——甘いッ！」

が、一方的にやられてばかりのアーチャーでは無かつた。手にある弓を霧散させると、新たに黒と白の双剣『陽剣・干将』『陰剣・莫耶』を投影。自分の攻撃だけを考え突つ込んできた魔理沙に、一瞬腕が消えるほどの神速で振るい、その周りに浮かぶ魔法玉を叩き割る。

「なつ……!?」

バキヤアツ！と、派手な音を立て魔法玉を破スペルブレイク壞された魔理沙は目を剥く。アーチャーはそうして呆けた魔理沙に、容赦なく蹴りを見舞つた。

反応が遅れガード間に合わず、魔理沙は牽制代わりの蹴りをまともに喰らつて吹き飛ぶ。更にアーチャーは追撃とばかりに手の夫婦剣を投げようと腕を交差させた。

「させるかよ！」

しかしキヤスターがそれを阻む。杖を地面に突き立て、炎と共に木組みの巨大な腕を召喚。捕らえんと襲つてきたのに、アーチャーは標的を変更し剣を投擲する。そして道具の神秘を解放する『壊れた幻想^{ブローケンファンタズム}』で以て、腕を爆破相殺した。その起こつた爆風に乗り、アーチャーは離れた位置に着地する。

「痛てて……助かつたぜ、キヤスター」

「気を付けな。そう簡単に仕留められりや苦労しねえよ」

「ああ、1ミスでも痛いからな。もう油断しないぜ」

言つて魔理沙は、墜落し倒れていた石畳から軽い調子で起き上がる。伊達に入道のパンチや居眠り門番の拳法などを喰らつていない。あの程度は大したダメージになつてないようだ。

それを見て、アーチャーは観念した風に口を開く。

「……やれやれ、正直見くびつていた。存外やつてくれる」

「お前さんこそ中々やるな、私の次ぐらいには。私が勝つたらその剣を作る魔術を教えてくれても良いぞ？」

「ふん、考えておこう」

適当に答え、アーチャーは再び——魔理沙が目をつけた——投影魔術を行使する。

認めたくはないが、魔理沙^{あのマスター}を遠距離の撃ち合いで相手取るのは悪手だ。たかがマス

ターと侮り、先に潰れるか結局はキヤスター頼りになるだろうと踏んでいたのが読み違いで、むしろキヤスター無くしてアーチャークラスの自分と渡り合う上、矢すら見切つてかわすのだから、自分の常識内に收まらない一人の敵だと改めざるを得ない。加えてキヤスターがいる現状、弓や剣と言つた同じ手に拘つていては最悪押し負ける。

ならば、とアーチャーはこの状況下に適した武器をイメージ、形にする。両の手に投影し終えた今までと毛色の異なるソレに、キヤスターが眉をひそめた。

それは——銃。先ほど投影して見せた黒と白の夫婦剣の面影を持つ二丁拳銃が、ほの暗い中で鈍く光っている。

「使い慣れてない類いの得物だが、今は銃これがが丁度良い。さあ、再開だッ！」

「!!」

と、二丁拳銃をアーチャーが向けてきたのに、魔理沙とキヤスターは即座に反応、二手に散つた。引き金が引かれ、火を噴いたのをやり過ごした一人と一騎は、それぞれアーチャーに攻撃を仕掛けんとする。

「ハアッ！」

アーチャーが二丁拳銃の利から、その二丁を分担し魔理沙達を狙い撃つ。それをスクリ『矢避けの加護』で防いだアーチャーが、今は手元に無い愛用の槍のように杖を握り直し、鋭い刺突を繰り出した。

空を切るほどの速さで打ち込まれる刺突を、アーチャーは刀身でもある銃身で受け止める。更にそのまま銃口をキヤスターに合わせて発砲。キヤスターは、それを辛うじて掠つた程度に済ます。

「これでどうだ！」

——魔廃「ディープエコロジカルボム」——

一方、遅れて魔理沙は何かを投げ付ける。

それは小瓶。アーチャーとキヤスターの間に転がった小瓶は、内包している魔力を膨れ上がらせて光を放ち出す。

「ツ……！」

「おいおいマジか!?」

鍔迫り合っていたサー・ヴァント二騎が驚いた瞬間、チュドーンッ！と破裂音を上げて小瓶は魔法爆弾としての機能を発揮し、大きく爆ぜた。

「——あつぶねえな！ もろともかよ!?」

「言つたら奴さん（アーチャー）にも避けられるだろ。それにお前つて、こう言うのがお家芸な気がしたんだが」

「何の話だ!?」

それはランサーの時である。この人でなし。

「つたく……まあ、チャラにしてやるか——引っ掛けたぜ」

「！ なんだとつ……！」

驚いたのは、再び距離を取つたアーチャーだつた。キヤスターがニヤリと笑い杖を一振りすると、アーチャーが降り立つた地面に隠されていたルーン文字が出現。気付いたアーチャーが何かアクションを起こすより早く、地面から樹木が急成長し捕獲する。「森の賢者を舐めるなよ。こんな事もあろうかとトラップを仕掛けといったのさ。獣を狩るので同じもんさね」

「おお……やるじゃないかキヤスター。そして私もナイスプレー」

「ハツ、その傲慢さはいつそ清々しいぜ。さて嬢ちゃん、ここはトドメを譲つてやる。デカいのぶちかましてやりな」「うぐつ……！」

樹木に絡み取られ、身動きが取れないアーチャー。かくなる上は二丁拳銃の神秘を解放して自爆覚悟で抜け出すか……そう考えていた時、外が覗き見れる木々の隙間から目映い光をアーチャーが見る。それこそは魔理沙が構えたミニ八卦炉から発する光。見るからにマズいと思える魔力が集まつていた。

「行くぜ！ しかと目に焼き付けな！」

放たれるは魔理沙お得意の一撃。『弾幕は火力だぜ』と豪語する彼女の代名詞とも言える光と熱の魔砲。パワーの体現。その名も……

——魔砲「マスタースパーク」——

撃ち放たれ、樹木に囚われるアーチャーが漏らす苦悶の声すら搔き消える魔力の波動が寺をも飲み込む。しかし寺は破壊されない。あくまでも狙つたもののみを、その力の限り吹き飛ばす。キヤスターが生み出した巨大な樹木も熱が焼き尽くし、宝具かと思わせる程の火力は数秒して収束した。

「……やつたか？」

余りに手加減なく吹き飛ばしてしまい、確認が取れない事をつい魔理沙が滑らせる。しかし、いつだってその一言はお約束とばかりに逆の結果を生む。煙を上げる焼け残った樹木から何かが飛び出し、その刃で魔理沙の首を狙つた！

「！ 嬢ちゃん！」

「うおっ、とお!?」

が、幾多の弾幕——弾に限らずナイフや刀まで——を避けてきた魔理沙。類い稀な回避能力で、振るわれた刃を屈んでかわす。それでも冷や汗が魔理沙の体温を一瞬下げるほど、反射的に避けたのは幸運のほか無かつた。

一矢報いる反撃も失敗に終わったアーチャーは、靈基を消滅させながら薄い笑みを浮

かべる。

「今のもかわすか……とんだマスターが来たものだ。負けたよ」

「……お前こそ大したガツツだぜ。運が味方しなけりや結果は逆だつたかもな」

「だが勝者はキミだ。敗者は大人しく去るとしよう……願わくば、縁あつて召喚される事を祈る」

魔理沙の一撃が決定打になるも、それでも最後に魔理沙を試して限界を迎えたアーチャーは姿が薄れゆく。今にも消えようとしながら、ふとアーチャーは思い出す。勝者である彼女達に伝えるべき事を。

「ああ……大聖杯に向かうなら急いだ方が良い。あそこにはセイバーの他に、もう一騎アーチャーのサーヴァントが居る。先に行かせたお仲間を心配すべきだろう」

「別のアーチャーだと?俺は知らねえぞ、そんなの」

「私も先程知つたからな。あの英靈は只者ではない様だ。精々用心して先を行くと良い

――

伝えて、アーチャーの靈基は完全に消滅した。守護者として後の事を規格外過ぎる、だからこそ引つくり返してくれそうな異邦者マスターに託して……

――よしつ、漸く繋がつた!聞こえるかい魔理沙ちゃん!?

と、そこへ丁度良いタイミングで通信が入る。魔理沙が慣れない手付きで腕の機器に触ると、ホログラムが現れて慌てた様子のロマニが映し出された。

「ロマン？ どうした、そんな愉快な顔して」

『愉快！ って、それはそれとしてだ！ 早く大聖杯に向かってくれ！ 正体不明のサーヴァントの攻撃を受けて所長達がピンチだ！』

「！ 何だと？」

ただ事ではないロマン。その報告に魔理沙は、今しがた忠告してきたアーチャーの言葉を思い出す。ロマンの言う正体不明のサーヴァント。それがアーチャーの言葉と合致して信憑性を生んだ。

「伊達に異変解決をこなしてきてない魔理沙、そこからの行動は早かつた。
「……キヤスター！ 乗れ！ マシユ達の所に行くぞ！」

「お、おお！」

箒に跨がる魔理沙。急ぐならサーヴァントの脚力に頼るより、こっちの方が断然早く着く。ただ一つの問題は安全性だが、考えるよりまずは動く質の魔理沙には関係無く、後は度胸だけだった。

「なあ嬢ちゃん、大丈夫なのか？ こんな箒なんかで」

「全くの無問題だぜ。少なくとも曲がれなくて死ぬアホみたいな真似はしないから、等に乗つたつもりで安心しろ」

「なんか良く分からんが引つ掛かる言い方だなあ、オイ！」
「氣のせいだろ。さあ、善は急げだつ！」

——彗星「ブレイジングスター」——

「う、うおおおおおッ!?」

魔理沙は浮かび上がりと共にスペルカードを宣言。等の穂に取り付けたミニ八卦炉からマスタースパークが噴射、その推進力で一気に凄まじいスピードで魔理沙達はかつ飛ぶ。後ろに乗り込んだキャスターが空気抵抗に持つてかれそうになるのを堪えていふのに気を配らず、魔理沙は一直線にマシユ達の元へ向かうのだつた——

↓↓↓↓↓↓↓↓

洞窟を最速で突つ切り、程無くして大聖杯に辿り着く。

広い空洞の中に一際大きな物体が淡い光を放つてゐるのが目立ち、魔理沙はそれを大聖杯だと認識し、目を見張つた。外の魔術に関する知識は聞いた程度にしか知らないが、魔理沙とて魔術の使い手。それがどんな魔力を有していく、何たるかは察せられる。

故に思わずコレクター魂の火が点きかける……が、

「遅いのよおおおおおつ!!」

全体に響き渡るほどの悲鳴に似た怒声で、現実に引き戻される。見れば声の主はオルガマリー。魔術で張った防壁に身を隠しているが、既にボロボロだ。

更にボロボロの彼女の足元には、更にボロボロ……靈基が消滅してもおかしくないほど手酷くやられたらしき妖夢とフランドールが氣絶して転がっている。どうやらオルガマリーは、戦闘不能に陥つた二騎を庇いつつ自分を守つていた様だ。

「おう、所長。ソイツらはどうしたんだ？」

「どうしたものこうしたも無い！セイバーは私の采配で倒すつて宣言しといて恥も外聞もカルデアスにぶち込むけど、早く来なさいよ！もう大変なんだからあ！」

今にも泣きそう、と言うか既に泣きが入つているオルガマリー。そこに爆発を避けて一人の少女が近くに滑り込んできた。武藏だ。

「あれ、マスター？こりや都合が良いや。つかぬ事を聞くけどあの子はマスター達の知り合い？妖夢ちゃんとフランちゃんが真っ先にやられちゃつて分からんんだけど……」

こちらもまたダメージを負つている様子の武藏が、魔理沙に向けて問い合わせる。魔理沙は武藏が立ち向かう方向、何やら空に浮かんでいる敵らしき影を見やつた。

その姿に魔理沙は息を呑んだ。自分の色合いに似た黒い容姿は新鮮。しかしほば毎日縁側で茶を飲んでるか、境内で掃除のふりをしているのを見てきた姿は見間違えようがない。むしろ見違えて目を疑う始末だ。

魔理沙は、その良く見知った敵の名を呆れ混じりで口に乗せて発する。

「おいおい冗談だろ？お前がそっち行くか——靈夢」

「……魔理沙か。久し振りね、と言つても大して口は開いても無いか」

博麗靈夢——樂園の素敵な巫女。結界の守護者。もう一人の異変解決専門家。本当なら、こう言つた異変には一番乗り出す少女が敵として魔理沙達の前に立ちはだかつていた。

魔理沙を視認し、いつもの口振りな靈夢。しかし口調とは裏腹に表情は冷ややか過ぎるほど冷ややかだった。まるで妖怪を退治する時のような、慈悲も情も無い冷たい目。敵を見る目が魔理沙達に突き刺さる。

その視線から目を反らすと、遠くにマシユと別の黒いサーヴァント——あれこそセイバーのサーヴァントだと分かる——が一騎討ちで戦つてているのに気付いた。マシユはセイバーの繰り出す攻撃に防戦一方で劣勢のようだ。

「嬢ちゃん、あれはお前の知り合いか？空を飛ぶ巫女の英靈なんざ聞いた事ねえぞ」「…………キヤスター、武藏と一緒にマシユの援護しろ。所長はとりあえず使えなく

なつた妖夢とフラン抱えて隠れてな」

「あ、貴女はどうするのよ!?」

「なーに、ちょっと手に余る奴の目を醒まさせにな。アイツは私が良く知ってる本気になれば洒落にならん妖怪巫女だ。私が相手するに限る」

言つて、魔理沙は靈夢と同じ目線へと飛び行く。地上に置いていかれたキヤスターと武藏は、そうした魔理沙の指示に従おうと無言で頷き合いセイバーとマシユが戦う場面に駆け出した。

「よう靈夢、一体どうしたんだ? 何か悪いモンでも拾い食いしたか」

一方、空を飛び上がった魔理沙は靈夢と向かい合う。

「別に、どうもしないわ。それより退いてくれる? 私は仕事しなきやならないのよ」「珍しいな? グータラなお前が仕事とは」

「ここは人間じやない奴が多いからね。妖怪退治が私の仕事よ」

平淡な顔付きで答えた靈夢は魔理沙の後ろ、オルガマリーと妖夢やフランドール、セイバーと交戦するマシユや武藏やキヤスターに視線を配らせる。つまり妖怪退治とはそう言うこと……魔理沙は察した。

「確かにサーヴァントや所長は生きてる人間じやないな……だが、今は私のみたいなモノだぜ? 横取りする気か?」

「ええ、寄越しなさい。妖怪は退治するもの。それを邪魔するならアンタを蹴散らすまでよ」

「やれやれ、どうやら本当に悪いモンを食つたようだな。どれ、一つこの魔理沙さんが治してやるとするか！」

おどけながら魔法陣を開く魔理沙。それを見て靈夢も陰陽玉を出現させる。わざわざ布告しなくても分かる、シンプルな弾幕勝負の開始だ。

霧雨魔理沙と博麗靈夢（オルタ）。かつての夜が明けない異変の時の、今回は善と悪がはつきりした対決が、鮮やかな弾幕で大空洞が彩られると同時に始まった……！

第六節 決着（KNOCKOUT）

「うわっと！」

追い込まれ、思わず地上に不時着した魔理沙へと大量の御札が降り注ぐ。それらを慌てて搔い潜り再び等に飛び乗った魔理沙は、頭上で浮かぶ靈夢に向けて憤慨した。

「何するんだ！ 今のは反則だろ!?」

「関係無いわ。私は妖怪退治を邪魔するアンタを蹴散らす。遊びに付き合う暇は無いのよ」

「つたく、遊びの無い奴め……それを言うんなら、もつと退治すべき奴を遊ばせてるのはどうなんだ？」

呆れ気味に言つて指で指し示す魔理沙。そちらを見ると、マシユ達三騎がかりで尚も圧倒するセイバー——セイバーオルタの姿があつた。

キヤスターの火球、武蔵の剣技、そしてマシユの必死の守りも押し返し、オーラの如く赤黒い魔力を噴出させるセイバーオルタ。それは騎士王の名に相応しい強さと言えた。だが、異変の中心である彼女は妖怪退治と謳う今の靈夢からすれば真っ先な対象なはずだ。

それを一瞥した靈夢は、しかし事も無げに答える。

「セイバー・オルタは一旦見逃してゐるだけ。アンタ達を片付けたら、その後で退治して私の役目は終わりよ」

「……お前、おかしくなつたついでにつまらなくなつたな」

「どう思おうが勝手。これが私の在り方よ」

「なるほど。だつたらお前こそ退治しなきやな。面白おかしくピチュってやる！」

——黒魔「イベントホライズン」——

言いながらスペルカードを宣言。渦を描くように魔方陣が回り、色とりどりの星をばら蒔く。

大空洞を彩る、場違いにも芸術的な星の弾幕。しかし靈夢はそれに気も留めず、流れるように合間を縫つてすり抜ける。飛んでくる矢を目視で避ける魔理沙も大概だが、靈夢はそれ以上だ。

そして掠りもしないで、お返しとばかりにスペカを掲げた。

——靈符「夢想封印」——

「！　くツ！」

宣言し、両手を広げた靈夢から大きな光弾が放たれる。物理法則を無視した軌道を描くそれらを魔理沙は咄嗟にガードで防ぐ。

バキンツ！——受けて分かる、常よりも馬鹿みたいな靈力（魔力）が籠められた数発きりの光弾に、派手な音を上げてガードが解かれた。それでも魔理沙自身は無傷で済む。と、ガードの解かれた直後を狙つて死角から靈夢の直接攻撃が襲つた。

再びのガード間に合わせ、まともに喰らう魔理沙。弾き飛ばされて態勢を立て直し、靈夢の方に向き直ると……

「……おいおい、私はただの邪魔者だろ？ 嫌に容赦無いな」

「抜け目無いアンタを甘く見るほど馬鹿じやない。宝具これで終わらせるわ」

「そりや有り難迷惑な評価だぜ……」

目を離した隙に七つもの陰陽玉を出現させ、その内の一つが先程の攻撃をカウントするように発光させている靈夢の姿を魔理沙は苦々しく見上げた。

名付け親である魔理沙は良く知つている。それは靈夢天性の究極奥義、その準備段階だ。恐らくあと六回の攻撃を許したら手が付けられなくなる……魔理沙は怖さ半分スリル半分で笑みを浮かべ、ならばと右手を突き出した。

「そつちがそう来るなら、私もマスターとしての力を使うか。令呪を以て命じる——『そろそろ起きてこい、妖夢』！」

そう述べると、手の甲にある紋様——二画残る令呪が赤く光り、魔理沙の前に一つの影が突如現れる。それは長刀を一振りして溜め息混じりに口を開く。

「……サー・ヴァント使いが荒いですよ、マスター？」

「出番を作つてやるんだ。寝込むのは後にしな」

皮肉っぽく言う影改め妖夢に、魔理沙は無遠慮に返す。妖夢は先の靈夢との戦闘でダメージを受けているが、怪我を気遣う心優しい人種は幻想郷でも中々いない。それを重々承知する彼女は、魔理沙をサポートするため靈夢に刀を向けた。

「反則なんて今更言うなよ？ 最初にズルしたのはお前だからな」

「構わないわ、纏めて片付けられるから」

短く受け入れた靈夢、言うが早いか巨大な御札ホーミングアミュレットを繰り出す。対して魔理沙と妖夢は二手に分かれ回避、それぞれに攻撃を仕掛けた。

「ツハアアア！」

「ふツ！」

接近した妖夢の刀の一閃。それを靈夢は靈力で強化したお祓い棒で弾き、返す刀より早く昇天脚——言わばサマーソルトキックを炸裂させる。そうしてまた一つ陰陽玉を光らす。

入れ替わる形で魔理沙がイリュージョンレーザーを射出し、靈夢を狙い撃つ。だが光の速さで迫る光線すら靈夢は華麗にグレイズ。空間移動で魔理沙の背後に回り込み、強烈な一撃を見舞つてきた。立て続け陰陽玉の輝きが増える。

「チツ、あの強さも反則だぜ……！」

「これならどうだッ！」

——人鬼「未来永劫斬」——

魔理沙が舌打つた端で、妖夢が空を滑るように駆け出す。刀を構え、目にも留まらぬ神速で斬りかかった。

それを靈夢はあっさりと喰らう。ズバッ！と衣を裂く音を立てて妖夢の刀が靈夢を斬る……が、その攻撃を甘んじて受けたはずの靈夢は、バラリと御札の塊に崩壊。バラけた御札が妖夢を襲つた。

「？ 変わり身……！」

「——フツ！」

迫る御札の奇襲を慌ててかわす妖夢。そうするのを誘つたのか本物の靈夢が急接近、お祓い棒を繰り出した。妖夢は殴り飛ばされ、次いで飛ばした先に靈夢が先回り。更なる追撃で打撃数を稼いだ。

「こんのオ……！」

——魔砲「ファイナルマスター・スパーク」——

それを目の当たりにし、業を煮やした魔理沙はミニ八卦炉を構えて極大のマスタースパークを解き放つ。広域を覆う魔砲に靈夢の姿は飲み込まれたように見えた。

「……やつたか?」——ふと呟く魔理沙。しかし、いつだつてその一言は逆の結果に終わる。背後にまた現れた無傷の靈夢が魔理沙を蹴り飛ばしたのだ。

こうして六つの陰陽玉が輝く。あと一つで発動する宝具で魔理沙も妖夢も纏めて片付け、それから地上の奴らも退治。これで靈夢の役目は終わりだ。決してそれが人間のためになくとも、黒く染まつた彼女は気にしない。たとえ人類が滅ぼうと今の靈夢は妖怪退治と言う目的に”囚われて”いた。

結果、陰陽玉を粉碎した一撃を自由ではない靈夢は避けるどころか碎け散つた陰陽玉を見るまで反応する事すら叶わなかつた——

「…………なつ…………!?

「…………ふう、アサシンらしく上手く行つた。これでチャラですよ、靈夢さん」

いつの間にか前方にいた妖夢が後ろ向きで言う。何が起こつたのかは分からない。

ただ一つ分かるのは、自分と同じランクの敏捷と踏んでいた妖夢が、反応できない速度で^{スペルブレイク}陰陽玉を破壊してきたと言う事だ。

『従者』——主の無茶ぶりをも遂行すべく、自身のステータスを上昇させる妖夢のスキル。妖夢はこれを用いて敏捷のランクをBからA+へと瞬間に上げ、靈夢の虚を突いたのだ。

この手を考えたのは魔理沙。交戦の最中、念話で妖夢に指示したのだ。本来の靈夢な

ら得意の勘により何か企んでると感付いていただろう……が、それはできなかつた。逆にそれを感付いていた人物が靈夢に迫つてくる。

「やつぱおかしくなつて、つまらなくなつた上に勘も鈍つてるな、靈夢！」

——「サングレイザー」——

「——！」

妖夢の方に意識を向け過ぎたせいで、靈夢は魔理沙の接近を許してしまう。黒化し、妖怪退治に囚われ、結果本来の彼女たらしめる力を失つた今の靈夢を見抜いていた魔理沙は、スペカ宣言と共に凄まじいスピードで特攻。靈夢が何か言うよりも早く、靈夢を撥ね飛ばした。

間髪入れず箒の上に立ち、打ち上げた靈夢めがけて再び突撃、箒の柄で突き上げる。

「く、あツ……!?」

「私のイメージカラーをパクつたのが運の尽きだ。大人しくいつものめでたい色に戻つてな」

そのまま打ち抜き、爆散。大空洞を明るく照らす爆発に呑まれ、靈夢はあえなく墜落する。地面へと落ちながら、その体は光の粒子へと変換された。

——後は頼んだわよ、魔理沙……

口に乗せたか否か、正気に戻つたように靈夢は笑い、消滅する。そこに残された『緑

色のアイテム』を手に取り、魔理沙はもう届かないだろう声で呟く。

「次会う時は、勝つた暁にお茶一杯淹れてもらうぞ？」

「――霧雨！」

と、そこへ下から良く通る声が届く。未だ一回休みのフランドールを背負ったオルガマリーだ。魔理沙と妖夢は地上に降りる。

「おう、所長。忙しくて悪いが、私はマシユ達の方に行くからな」

「勝手になさい。こちとら引き受けといて返り討ちで格好つかないたら無いわ……」

バツが悪そうに、あるいは不満そうに口を尖らせるオルガマリー。しかし先の戦いを見て認めざるを得ないのだろう。魔理沙に託す。

「妖夢はご苦労さん。まだ万全じやないだろ？後は任せろ」

「あ、一応気遣つてくれるんですね」

「一応お前らのマスターだからな。ホワイトなマスターに恵まれた事を感謝しな。それじゃあ一丁解決してくるぜ！」

言つて魔理沙は飛び立つ。目指すは激戦の音が依然響くマシユ達の元。星の光を撒き散らし、魔理沙は決戦の場に急ぐ。

その姿を見、先の戦いを思い返しながらオルガマリーはふと独りごちる。

「……弾幕、良いなあ……」

「弱い。数で来ようとこんなものか」

「なんて、強さ……！」

「クソッ……伊達にアーチャーやバーサーカーを倒してねえってか……！」

一方でそのマシユ達の方。こちらも決着が近い。

余りある魔力を惜しみなく噴き出し、いかんなく力を発揮するセイバー・オルタ。キヤ
スター・や武蔵の猛攻、マシユの必死の守りもものとせず、とうとう膝をつくマシユ達
の前で毅然と立つ。

「終わりだ。失せるが良い」

ドウツツツ！と、言いながらセイバーオルタの掲げた黒い聖剣が魔力を上乗せし、空気を震わせる。天を貫かんばかりの黒い光。その威圧感は宝具であると嫌でも分からされた。

それを見上げて息を呑むマシユ達。必ず勝利をもたらす聖剣の光は、さしものキヤスラーも戦慄する。

「マシユちゃん!?」
だが、それでもなお立ち上がり身構える少女がいた——マシユだ。

「おい、どうするつもりだ！」

「つ……大丈夫です、武藏さん、キヤスターさん……お二人は、私が守ります……！」

積み重なつたダメージで満足に動かない体に力を込め、巨大な盾を支えるマシユ。宿

る英雄も、宝具の真名も分からぬ身で余りこて退かない……魔理沙なら、そうしないから。

先輩のサーヴァントとして、仲間を守らず恥ずかしい姿は見せられなかつた。

……
良い覚悟だ。その宝具の力で、我が宝具を受けてみろ——【卑王鉄槌】極光は反転する

光を呑め！約束された勝利の剣アアアン!! エクスカリバー・モルガ

ドンツツツツツ
!!!

放された聖剣の光。全てを呑まんとする黒い光が一点、マシューと正面衝突する。

11

悲痛さにも似た、力みの声をマシユが漏らし、盾をあらんばかりの力で踏ん張る。少しでも気を緩めれば消し飛ばされる、最早キヤスターや武藏の介入も叶わない工ネルギーの奔流。だからこそマシユは仲間を守るため、魔理沙にあの時の礼を言うため死力爆破事故を尽くす。

だが、いかん気の持ちようで何とかなるほど黒き騎士王の力は容易くない。際限ない

高エネルギーの光線は容赦なくマシユを食らわんと力を叩きつけてくる。もう、駄目だ
……！——そうマシユの頭に弱音が過った時、

魔理沙の手が盾を握るマシユの手に重ねられた。

「……先輩……？」

「まだまだ気張れよマシユ！大トリの私のために！」

マシユはもちろん、後方の武藏達も驚く中、駆け付けてきた魔理沙は快活にニッとも笑いかける。

それを見て、マシユは不思議な力が込み上げてきた。実質的なものではなく、気持ち的なもの。自信に満ち溢れた魔理沙の笑みに、マシユも活力が湧いてくる。

今なら何でも出来る気がする——そう思えた時、魔理沙の残り一画の令呪が独りでに魔力を受け渡し、マシユは溢れん限りの力に任せて叫んだ。

——それは全ての■、

全ての■■を癒す、

我らが■……

顕現せよ、『■■・■■■■■』——！

「！ なにツ!?」

驚愕の声を上げたのはセイバー・オルタだつた。

マシユのところどころ霧がかつた詠唱と共に現れた半透明の城壁。それが聖剣の一撃を受け止め、防ぐ。

そしてその防壁に遮られたエネルギーは行き場を失い逆流。宝具の正体に動じたセイバー・オルタに轟音を立てて打ち返された。

「……ぐうツ……！」

しかし、セイバー・オルタは倒れない。放たれる方と返される方のエネルギーがぶつかり、最小限のダメージに抑えられたのだ。

が、そのダメージが決定的な隙を生み、反撃を許す事となる。

「――大した火力だが、幻想郷じや二番目だぜ！」

「！」

煙が晴れ、最初に姿を見せたのは魔理沙。その傍から気力尽きかけながらも身構えるマシユ、立ち上がつた武蔵とキヤスターが続いて現れる。先頭の魔理沙はミニ八卦炉を突き出し、既に発射寸前まで整えていた。

実は靈夢との戦いで魔理沙は魔力をほぼ使い果たしている。そこで取り出されたるは靈夢から託された緑色のアイテム——『ボム』。それを燃料に魔理沙は放つ。靈夢が

託し、マシユが守り、武蔵達が繋いでくれた極大の一発を。

——恋符「マスター・スパーク」——

「マスター・ア・ア・ア・ア・ス・パ・ア・ア・ア・ー・ー・クツ!!」

「ツ！『約束された勝利の剣!!!』

咄嗟にセイバー・オルタも宝具を再発動。白と黒。一瞬すら無い間を置いて光線と光線がぶつかり合い、形容しがたい衝突音を響かせる。

片や光を呑む反転した極光。片や光と熱の魔砲。

片や人間である事を捨てた騎士王。片や人間のまま成り上がった魔法使い。

全く逆の拮抗。伝説と幻想、力の差は誰が見ても圧倒的だろう。しかし、その衝突にある勝機は何かが違つた。

「ぬううツ……！」

「吹つ飛べええええツ！」

それは何なのか。上手く言えないが、果たして神が定めたろう結果を裏切り、力が全ての眩い光が勝利を約束されたはずの黒い光を逆に飲み、セイバー・オルタをも巻き込む。

あらゆるものを受け飛ばす魔砲の一撃。黒すらも染める白い光に包まれ、セイバー・オルタは耐える。耐えて、耐えて……そして呟く。

「……そう、か……穢れなきあの者らしい。良きマスターを得たな、
■ ■ ■ ■ ■ ——」
言つて、セイバー・オルタはその耐えた力を緩める。その無表情を貫いていた顔には笑
みを浮かべて光を甘んじて受け止め、自身の敗北を受け入れたのだつた——

第七節 少女は裏切りに疵を残す

「してやられたな……」

尚も毅然と立つが、その身体は消滅を始めているセイバー・オルタ。よもやこの期に及んで戦いを続行する意味も無い。騎士らしく武器を霧散し、代わりに予想外の結末から自嘲する。

「聖杯を守り通すつもりでいたが、まさかマスターに敗北を喫しようとは……結局、私一人では同じ末路を迎えると言う事か」

「？ どういう意味だ、そりや？」

口振りに気を留めた魔理沙が問い合わせるも、セイバー・オルタは自身の消滅が近い事を悟り、答えにならない言葉を返した。

「いずれ貴様も分かるだろう。グランドオーダー——聖杯を巡る戦いは、まだ始まつたばかりだとな」

そう言い残し、セイバー・オルタの靈基は完全に消滅。その場には水晶体——セイバー・オルタの所持していた聖杯が現れる。と、同時にキヤスターの身体も光の粒子に包まれた。

「…………やべえ、ここで強制帰還か」

「キャスターさん!? 一体……!」

「この事態を維持してたセイバーが消えて、俺も漸くお役御免つてこつた。最後の最後みつともなかつたのは心残りだが仕方無え……後の事は宜しくな」

やれやれ、と杖を担ぎ退去を受け入れるキャスター。そうして仮とは言え契約し気に入つたマスター、魔理沙の方へと向き直つた。

「そんな訳で次があつたら、そん時はランサーとして喚んでくれや。きっと力になつてやるぜ」

「本当か? 何度も死なれたら世話無いぞ」

「口の減らねえ奴だな、おい……」

「半分冗談だ。こつちこそ、その時はルーン魔術とやらを教えてくれよ?」

根は結構似てる二人、そう言い合つて笑うとキャスターは消え去る。召喚されても別
人でしかなくとも、再会を誓つて……

そこへ入れ替わるかのように、フランドールをおぶり妖夢を引き連れたオルガマリー
がやつて來た。先のセイバーオルタの言葉を聞いていたらしく、真剣な面持ちで呟く。

「…………グランドオーダー冠位指定…………あのサーヴァントがどうしてそおほひよふほ」

しかし、それは突如小さな手に頬を引っ張られて形無しにされた。

「つてちよつと！人が眞面目な時になに？！」

「だつてもう起きたんだもの。降ろしてくれなきや困るわ」

怒るオルガマリーが背後に振り向く。ちよつかいを出したのは今しがた目覚めたフランドール。不機嫌そうに言う彼女に、オルガマリーは怒鳴り声を上げる。

「誰が背負つてあげたりしたと思つてるのよ！さつきまで伸されてた役立たずの癖に！」

「あら、生意氣な人間ね。血を吸つて下僕にしてやろうかしら」

「ひいッ!?ま、待ちなさい！霧雨！このサーヴアントを令呪でまた止めて！」

「あー、それは無理だ。この通り品切れだぜ」

「なあああッ！」

「ぎやおー、食べちゃうぞー！」

「待つて待つて待つてえええつ！お菓子！お菓子あげるから！だからやめてえええつ！」

すぐさま威勢を失い、フランドールを放り投げ涙目で逃げ出すオルガマリー。それをフランドールは牙を剥き、襲う真似をしながら追い掛ける。魔理沙はおかしそうに高見の見物。つられてマシユ達も笑みが溢れた。

激戦から一転、和やかな雰囲気に包まれる一同。異変は解決した。後は聖杯を回収し

てカルデアに帰還すれば終わり。カルデアの被害やオルガマリーの件もあるが、ひとまず一段落だ——誰もがそう思う。

直後、大空洞に響き渡る拍手と聞き覚えある声で魔理沙、マシユ、そして何よりオルガマリーは各自驚きを表した。

「——いや、まさか君達がここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容の許容外だ」

「……！レフ、教授……！？」

大聖杯の前、発せられる光を後光に現れた人影にマシユは目を疑う。

紳士然としたスーツにシルクハット、人の良さそうな笑顔を貼り付けたその人物はレフ・ライノール。爆破事故で行方知れずとなっていたカルデアの技師だ。

それがこのタイミングで、有り得ない場所に立つて居る。マシユ達に違和感が募る。

『レフ……！？レフ教授だつて！？彼がそこにいるのか！？』

そこへロマンから声だけの通信が入る。どうやらカメラ機能が不具合を起こしたのか、こちらの画像は映っていない様子だ。

レフはそのロマンの声に親しげに話し掛ける。

「ロマニ君か。君も生き残つてしまつたんだね。すぐ管制室へと言つたのに、全く……どいつもこいつも統率の取れないクズばかりで吐き気が止まらないな」

「つ！マスター、私の後ろへ！あのレフ教授は危険です！」

ニヤア、と歯を剥いて凶暴な笑みを見せたレフに、マシユは魔理沙の前に立ちはだかる。武藏、妖夢、フランドールもまたマシユと同じく危険を感じ取り身構えた。だが一人だけ、そんなレフに歩み寄ろうとする者がいた——オルガマリーだ。

「所長？！」

「レフ……ああ、レフ、レフ、生きていたのねレフ！」

熱に浮かされたようにオルガマリーは一步一歩近付く。マシユの声など届いていい。

カルデアの最高責任者として気苦労の絶えぬオルガマリーにとつて、レフはかけがえのない人物だ。故に訝しむより無事を喜び、今回の件で積もり積もつた感情を慰めてもらうべくレフの元に向かう。当のレフはそれを良く分かり、優しく言葉を掛けてきた。「やあオルガ、君も来ていたのか。生きていて嬉しいよ」

瞬間、何とか今まで保てていたオルガマリーの心はポツキリ折れた。

「…………めん、レフ、生きてるとか言わないで……無理、泣く、もう泣くう…………」「む？」

足から崩れ落ち、地面に突つ伏すオルガマリー。さしものレフへの盲信も、魔理沙らに培われた生死に触れたトラウマには勝れなかつたようだ。

それでも氣力で立ち上がり、

「で、でも！ 貴方なら何とかしてくれるわよね？ 私の事も、カルデアの事も！ いつだつて貴方が何とかしてくれた！だから——」

「はいストップだ、所長」

「ぐふう！？」

一縷の救いを求める一心で駆け出したオルガマリーの襟元を、いつの間にか近寄つた魔理沙は無情にも掴む。自重に首を絞められるオルガマリーは後ろにすつ転んだ。

「な、何を——」

「まだ蹲つてたままを獎めるぜ？ 人間じやない奴は何をやらかすか分かつたもんじやないからな」

「ほう？」

マシユとオルガマリー、通信越しのロマニは魔理沙の言葉に驚愕。一方でレフは若干感心したように声を漏らす。

「何を根拠に私を人間じやないと？ 妄想にせよ確信にせよ、参考に聞いておきたいね、4番目のマスター君？」

「妖怪と縁の無い人間相手なら騙せるだろうが、私にはおざなりな変装だ。最初に会つた時から気付いてたぜ」

「ならば、何故その時に言わなかつたんだい？」

「人間じやない奴も採用してんのかと思ったからな。それでももしかしたらつて名乗つといた。私は、敵に対しては格好つけて名乗る事にしてるんだ」

『——私は、霧雨魔理沙。普通のマスターだぜ！』

確かに魔理沙はレフの前で名乗る際、格好つけながら自己紹介していた。逆にロマニには普通に名乗つている。

ほんの些細な事。しかし、騙せていると嘲笑つていたレフはその事実に眉を潜めた。
「……なるほど。何の利用価値も無いと泳がせていたが、矮小な人間にしては見所がある。正直、この世界と心中させるより直々に殺してやりたいほどだ」

「妖怪退治の専門家である私に挑戦状とは良い度胸だな。受けて立つぜ？」

殺氣を滲ませるレフに、魔理沙は好戦的にミニ八卦炉を構える。先程の連戦で魔力切れではあるが、それでも関係無い。喧嘩を売られたら買うまでだ。
が、レフは何か気づいたように余裕な笑みを浮かべた。

「おつと、けれど時間も時間だ。君みたいな虫一匹に付き合つては私は暇じゃない。それよりもオルガ、君に見せてあげよう。君が人生を費やした愛しいカルデアの現状を

ね

「え……？」

言つて、レフはその手にある水晶体を掲げる。それはまさしくセイバー・オルタが残した聖杯。レフは手元に手繰り寄せていたそれを輝かせ、背後に空間の穴を開く。その中にあるものにオルガマリーは愕然とした。

「こ、これって……!?」

「そう、これこそ君達アムニスフイアの愚行の末路だ」

それは——カルデアス。

しかしその様子は本来のものと全く異なる。まるで太陽のように真つ赤な輝きで燃えていた。

「人類の生存を示す青色は一片も無い。すなわち、あれは人類の痕跡が無いと言う事。これが今回のミツシヨンが引き起こした結果だ」

「そんな……嘘……こんな、事……！」

「良かつたねえマリー！君のいたらなさが悲劇を呼び起こした訳だ」

加虐的な、暴力的な笑顔でレフは絶望するオルガマリーに言う……君のせいで人類は滅んだのだ。

余りにも現実味の無い、人一人が背負うには重大過ぎる事実。「有り得ない、私は失敗

「しない」とオルガマリーは事態を認め切れない。それを煩わしく思うのは、レフだ。

「全く、相変わらず苛立たせる天才だな、君は。そんな君に最後の望みを叶えてやろう」と、徐にレフは聖杯を持つていなしの方の手をオルガマリーへと翳す。するとオルガマリーは謎の力によつて体が浮き上がり、そしてカルデアスに引き寄せられた。

「な、何が……起きて……!」

「どうせ私が足下に仕掛けた爆破装置で肉体は消し飛んでて、カルデアに戻ればその意識だけの存在は消滅するんだ。最期の記念に君の宝物に触れるといい。私からの慈悲に喜びたまえ」

その処理できない真実、言葉にオルガマリーは狼狽える。

「なに、言つてるの? や、やめて、お願ひ。だつてカルデアスよ? 高密度の情報体よ? 次元が異なる領域なのよ?」

「ブラックホールと変わりない。それとも太陽か。ともかく人間なら分子レベルに分解される地獄の具現だ。生きたまま無限の死を味わえるよ」

「……いや……いや、いや! 助けて! 助けてよレフ! 本当に、本当に私をつ!?!」

「今更頭の悪い確認をしないでくれ。死に際は美しくありたいものだろう? まあ、散々私を苦労させてきた君が苦しんで死ぬ様を見れたら楽しいだろうがねえ」

もう隠しも誤魔化しもしないレフの本性。信じていたものの理不尽なほどの裏切り。

それを目の当たりにしたオルガマリーの感情は、恥も外聞も無く決壊する。

「いッ……いやあああああッ!! 誰か、誰か、誰か助けてエツ! こんな、こんな所で死にたくない! ……だつて、まだ、褒められてない……! 誰も、誰も私を認めてくれてないッ! やだ、やめて、誰か、誰か私を助けてえ……! 私を褒めてよお……!」

「オルガマリー所長……!」

子供のように泣き喚いて、感情を吐露するオルガマリー。だが誰も助けない、誰も助けにいけない。行けば彼女もろとも巻き込まれて一貫の終わり。マシユ達もただ無力に見届ける事しかできない、泣きじやくる少女が無惨に死ぬ様を……誰も……

「——所長! 私が渡したものんをぶつけろッ!」

「ツ!」

その時、魔理沙が声を上げた。

オルガマリーはその声の指示に従い、死に物狂いでポケットからある物を取り出し、力一杯眼下のレフへと投げ付ける。

——ボフツ!

「うぶつ!?

それは——キノコ。まさしく魔理沙がオルガマリーと合流した時に渡した代物だ。オルガマリーはあの時、怒鳴りながらも捨てずにポケットに仕舞いつぱなしだったので

ある。

そのキノコはレフの顔に当たると多量の胞子を散布、視界を奪う。だが、そんな程度でどうにかなるものでは無い。事実レフは胞子を振り払い呆れたように笑つた。

「……フツ、無駄な抵抗だな。たかが目眩まし如きで君の運命は変わりは——」直後、彼は今まで感じた事の無い感覚に襲われた。

レフは思考を巡らせる——何だ？まさか、毒？いや、我らが王に寵愛されしこの体が毒なんて易い手で脅かされる訳がない……では何だ？この目と鼻を擦るかゆ、かゆ、かゆ……うま……じゃなくて！？

「魔法の森には色んな毒キノコがあつてな。大抵は胞子に幻覚作用があるものばかりなんだが……」

そいつは胞子を吸うと酷い花粉症になるレア種だぜ」

「ぶわあああアアアアアアツ?!?!?」

魔理沙の説明が終わつた途端、凄まじい痒みと共にレフの顔は涙と鼻水で溢れ返つた。まるで滝の如く流れ出る体液と、顔の内部から攻めてくるような痒さからレフは絶叫する。

醜い、と言うか見にくい。絵面的に。

「馬鹿なつ!? 何だこの痒みは……あ、洗いたい！ 目玉を取つて洗いたいくらい痒いッ！ 鼻も、息が、口で呼吸を……ガアアアアツ！」

かつてない方向からの攻撃に慌てふためくレフ。「有り得ない、この私が何故……！」 と、先程煩わしく思つていたオルガマリーと同じような呟きを吐く。

結果、余裕を失つた彼は失態をした。自身の異常対処に気を回したせいで力を緩め、丁度自分の頭上にいたもの——オルガマリーが浮力を失つた事を忘れる。

「……レエエエエフウウウウツ!!」

「！ し、しまつ……ぐぶおおツ!!」

怒りのまま急降下してきたオルガマリーの渾身の蹴りが、一瞬遅く気付いて上を向いたレフにクリーンヒットする。某ゴールデンなライダーも顔負けのラ○ダーキック。その威力に脱力させて開けたレフの口から素敵な白い歯が一本、抜け落ちた。

それだけでも凄い。しかし驚くべき事は留まらず、なんとレフを蹴り飛ばしたオルガマリーは、自ら飛んで魔理沙達の元に戻る。魔理沙や妖夢らの使う飛び能力を、この土壇場で会得したのだ。

「おお、中々やるな所長」

「ええつ！ 人間やろうと思えば何でも出来ちゃうもんねつ！」

「よつしや、その何でも出来るついでだ。あの憎たらしい野郎に一杯でも十杯でも喰わせてやろうぜ」

「もちろん！……こんな感じ!?」

言つて、ドドドドオン！とオルガマリーはばら蒔いた小石を一斉射撃で放つた。弾幕だ。

魔理沙らに弄られて威厳を損ない、レフに掌を返されて信用する者を失い、死を目前にしてを感情を爆発させた彼女に最早迷いも躊躇いも無い。自分のやりたい事、自分したい事をやる。故に飛べたし弾幕も撃てたのだ。

涙と鼻水、更に口から血も垂れ流した見るも無惨なレフにオルガマリーの弾幕が襲い掛かる。密度は妖精程度。それでも今のレフには充分な反撃だ。数打ちや当たるの一発が、彼が奪つた聖杯を弾き飛ばした。

「締めはコレだ。ぶちかましてやれ」

「オーケー……！」

魔理沙が手渡してきたものをオルガマリーが受け取る。四尺マジックボム——かの指名手配された天邪鬼が魔理沙から盗んだ反則アイテム。それを抱えたオルガマリーは、弾幕を放つ要領で放つた。人間の力では有り得ない飛距離でレフに投げ込まれ、そして爆発する。

ドパアアアアアンツ!!

「よし！」

花火のような派手な爆発が巻き起こり、オルガマリーはまるでボーリングのストライクを取つたかの如くガツツポーズ、更に魔理沙にハイタッチ。そこにいるのはもう責務に追われるオルガマリー所長ではない。色々吹つ切れまくつた、オルガマリー・アースミレイト・アムニスフィアと言う一人の少女だった。

「貴様らアアアアアアツ!!」

と、爆煙を吹き飛ばしボロボロのレフが姿を現す。最早紳士の面影は無く、今に人外の姿を明かしそうなほど激昂している。牙を剥くように開いた口は、歯抜けで迫力に欠けていた。

「良くも、良くも、良くもクズの分際で私をコケにしてくれたなア！殺してやるツ……！
生きて帰すものかアツ！」

歯も冷静さも欠いて、怒り狂うレフに魔理沙達は迎え撃つ姿勢を取る。いかにみつともない姿でも確かに感じ取れる尋常ならざる力。激戦で疲弊する魔理沙達だが、それでも後に退けない以上、立ち向かうまでだった。

しかしその時、世界が揺れた。

「……ぐつ、このまま続ければ私も巻き添えか……まあ、良い。私はまだ職務があるのでね。去らせてもらおう。憂さ晴らしに諸君はこの世界ごと时空の歪みに呑み込まれてくれたまえよ」

事態に余裕を取り戻したレフは、また醜悪に笑む。そして更に絶望へと叩き込むべく言い放つた。

「もはや誰にも、この結末は変えられない。何故ならこれは人類史による人類の否定だからだ。お前達は進化の行き止まりで衰退するでも、異種族との交戦で滅びるのでも無い……自らの無意味さに！自らの無能さに！我らが王の寵愛を失つたが故に！何の価値も無い紙屑の様に、跡形もなく燃え尽きるのさッ！無様になアアア！」

果てしなく人類全てを蹂躪した一言一句。一縷の希望も無いと断言しながらレフは最高に笑つて宣う。いかな間違つた文言だとしても、その言葉は常人なら絶望に陥つていた。

が、実際それを聞き届けた魔理沙達はあつさりと言う。

「……いや、その面で言われてもな。説得力無いぜ」

「なんか何とか出来そうな気がします」

「貴方みたいのに滅ぼされるのは嫌だなあ……だから圧し通るわよ？」

「一応言わせてもらうけど、今は貴方の方がよっぽど無様よ？見るに耐えないわね、レ

フ

「レフ教授、汚いです」

「きたなーい♪」

「ぐうううううツツツッ!!」

全く堪えてない少女達の集中砲火、主に顔について。マシユにすら言われて怒りに震える涙と鼻水と血でまみれたレフだが、そうしながらもこの世界から消え去る。もう世界の崩壊が間近だからだ。

レフが消えたと同時に、大空洞が目に見えて震えた。

「地下空洞が崩れます……！いえ、それ以前に空間が安定していません！ドクター！至急レイシフトを実行してください！」

マシユの声に、ロマニは悠長ではない口振りで答える。

『今やつてるよ！でもゴメン、そっちの崩壊の方が早いかもだ！その時はそちらで何とかしてほしい！ほら、宇宙空間では数十秒なら生身でも平気らしいし！』

「黙つていてくださいドクター！私、怒りで手が出そうです！」

「宇宙で息できたがなあ」と言う魔理沙は置いといて、マシユの急かしにドクターは出来るだけ懸命を尽くす。

一方、神妙な出で立ちのオルガマリーに、妖夢が一番氣にしてるだろう事を切り込む。

「あの、良いんですか？あの人の言葉が眞実なら、戻つたら貴女は……」

「……構わないわ、最後にやる事やれだし。悔いは無い」

迷い無く答えて微笑むオルガマリー。その顔は満ち足りていた。吹つ切れた彼女にもう死への躊躇も無い。

かくして異変を解決された世界は、空間の歪みに全てを呑まれる。

刹那、魔理沙は何やらフォウが飛び出してきたのを見たが、何事か考える暇なく、すぐ何も分からなくなってしまうのだつた――